

令和4年度（第61回）農林水産祭
第33回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【美しい棚田 稲倉 ～眺めるだけではない、カカワレルタナダ～】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時	令和5年3月6日（月）13時30分～16時00分
場所	上田高砂殿 長野県上田市
主催	農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和5年4月
公益財団法人 日本農林漁業振興会

発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和5年3月6日（月）『美しい棚田 稲倉 ～眺めるだけではない、カカワレルタナダ～』をテーマに、平成4年度農林水産祭むらづくり部門の天皇杯受賞者である長野県上田市の「稲倉の棚田保全委員会」の業績を取り上げて、約90名を超える皆様の参加の下、開催しました。（オンラインでの配信も併せて行い約50名を超える方々にご視聴頂きました。）

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和5年4月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和４年度（第６２回）農林水産祭
（第３３回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール・・・・・・・・・・	1
シンポジウム出席者・・・・・・・・・・	2
受賞者の業績概要・・・・・・・・・・	3
シンポジウムの記録・・・・・・・・・・	4

令和4年度（第61回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【美しい棚田 稲倉 ～眺めるだけではない、カカワレルタナダ～】

《スケジュール》

13:30～16:00

（敬称略）

- | | | | |
|---|------------|--|-------------------------|
| 1 | 開 会（13:30） | 公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事 | 小栗 邦夫 |
| 2 | 挨拶 | 農林水産省関東農政局長
長野県上田地域振興局長
上田市長 | 信夫 隆生
柳沢 由里
土屋 陽一 |
| 3 | 選賞審査報告 | 農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査
（茨城大学農学部教授） | 福与 徳文 |
| 4 | 業績発表 | 令和4年度むらづくり部門天皇杯受賞
稲倉の棚田保全委員会 委員長
〃 事務局次長 | 久保田 良和
玉崎 修平 |

・・・休憩（14:30～14:40）・・・

- 5 ディスカッション（14:40）
（登壇者）
- ・コーディネーター
福与 徳文（3に同じ）
 - ・業績発表者
久保田 良和（4に同じ）
玉崎 修平（〃）
 - ・コメンテーター
畠山 智之（農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員
（NHK放送研修センター日本語センターエグゼクティブアナウンサー））
小谷 あゆみ（農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 フリーアナウンサー）
土屋 陽一（上田市長）
内川 義行（信州大学農学部准教授）

（内容）

- ・意見交換、質疑応答
- ・総括

- 6 閉 会（16:00）

第33回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R5.3.6（敬称略）

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	久保田 良和	令和4年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 稲倉の棚田保全委員会 委員長
	玉崎 修平	令和4年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 稲倉の棚田保全委員会 事務局次長
コーディネーター 及び選賞審査報告	福与 徳文	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 （茨城大学農学部教授）
コメンテーター	畠山 智之	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 （NHK放送研修センター 日本語センター エグゼクティブアナウンサー）
コメンテーター	内川 義行	信州大学農学部准教授
コメンテーター	土屋 陽一	上田市長
挨拶	信夫 隆生	農林水産省関東農政局長
	柳沢 由里	長野県上田地域振興局長
	土屋 陽一	上田市長
司会・進行	小栗 邦夫	（公財）日本農林漁業振興会 常務理事

むらづくり部門

出品財 むらづくり活動

稲倉の棚田保全委員会

長野県上田市



1 地域の沿革と概要

上田市は、長野県東部に位置する。

棚田のある殿城地区は、市北東部の殿城山山麓の急傾斜地と神川沿いに及ぶ中山間地帯に分かれている。稲倉の棚田は山裾から谷あい広がる大小様々な形状で約 30ha（約 780 枚）の水田により構成されている。

高齢化や後継者不足により耕作放棄地の増加が顕著となり、棚田の荒廃により地域の活力低下に危機感を持った地元住民たちが保全活動を開始。平成 11 年の「日本の棚田百選」の認定を契機に、保全活動を行うための前身組織を設立。平成 15 年に持続的な保全活動や地域振興活動の強化のため、周辺の自治会や市、JA と連携し「稲倉の棚田保全委員会」を設立した。

2 むらづくり組織の概要

棚田保全委員会は、地元住民や他の地域団体の代表等で構成され、定例会を毎月開催し、農作業計画や交流による地域活性化に繋がる各種取組方針を議論し、合意決定している。平成 30 年からは委員の外部募集を始め、関東圏の都市住民や子育て世帯等の非農家層が加わり、構成員の幅は広がりを見せている。

3 むらづくりの取組概要

（1）農業生産面

- ① 減農薬栽培を行い、昔ながらの「はざかけ」でゆっくり天日干しした棚田米は、豊かな香りとやさしい甘みがあり、地元店舗や直売所等で販売されるほか、上田市のふるさと納税返礼品として取り扱われている。
- ② 棚田保全の人手と資金を支えるため「棚田オーナー制度」を導入し、地元酒造会社と連携した「酒米オーナー」や気軽に保全活動に参加できる「棚田ファン」等消費者ニーズに合わせたコースを新たに展開し、会員は年々増え（令和 4 年度 133 組）、特に都市住民の増加が著しく、都市農村交流の拠点となっている。

（2）生活・環境整備面

- ① 農閑期の棚田を有効活用した棚田キャンプや、代掻きに合わせて子供達に田んぼで遊んでもらうイベント等、棚田の景観・地形等を生かした体験・交流の機会を毎年創出している。令和 2 年度より棚田内を松明を持って練り歩く参加型イベント「ししおどし」を開催し、地域の新たな伝統行事としての定着に努めている。棚田への観光客は年間 2 万人を超え、観光資源になっている。
- ② 棚田近辺にオープンしたクラインガルテン（滞在型市民農園）の指定管理を受託し運営している。農作業指導や棚田を利用した地域交流を通して、将来的には地域への移住・定住や農業の担い手育成の効果も期待される。
- ③ 首都圏や地元小学校からの学習旅行や農作業体験の受入や、棚田をビオトープとした生物多様性授業の実施等、農業・農村への理解醸成に寄与している。

4 他地域への普及性と今後の発展方向

棚田オーナー制度や各種体験交流イベント等、毎年新しい取組に挑戦しており、今後の発展が期待できる。棚田を地域資源として生かし、地域住民だけでなく地元企業、地域外の都市住民等の多種多様な「カカワリ」のもと地域の発展に繋げている本取組は、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

ただいまから「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を担当しております日本農林漁業振興会常務理事の小栗でございます。皆様にはご多忙中のところ、また引き続きコロナ禍が懸念される中、このように多数ご参加いただきまして、まことにありがとうございます。また、本日はオンラインでも、一方方向ではございますが、視聴できるようにいたしました。慣れない設営ですが、よろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと、毎年開催しているものでございます。

農林水産祭は昭和37年に始まり、今年度で61回目を迎える伝統ある事業でございます。このうち、表彰事業は7部門に分かれておりまして、過去1年間に各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞されました400近い出品材の中から、厳正な審査を経て、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞のいわゆる3賞を授賞するものでございます。

特に天皇杯につきましては、我が国で天皇杯なるものが合わせて30下賜されておりますが、そのうちの大部分はスポーツ関係でございます。例えば、正月の天皇杯サッカーであるとか、国体の天皇杯であるとか、有名でございますが、このうち7部門を農林水産部門にいただいているということで、まさに農林水産業が国の礎であり、ご皇室の熱い思いをありがたく思っているところでございます。今年度も昨年11月、勤労感謝の日、昔で言うところの新嘗祭の日でございますが、明治神宮におきまして表彰授与式を実施いたしました。

本日は、むらづくり部門で天皇杯を受賞されました、長野県上田市の稲倉の棚田保全委員会の久保田委員長、玉崎事務局次長にお越しいただきました。改めてお話をいただき、また、学識経験者の方々と意見交換をお願いしたところでございます。天皇杯受賞後はますますお忙しくなったことと思われそうですが、快くお引き受けいただきました。改めまして、お祝いと御礼を申し上げます。

それでは、本日は、共催いただいております農林水産省からは、関東農政局の信夫局長にご参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。

ご紹介いただきました関東農政局長の信夫でございます。

本シンポジウムの開催に当たりまして、一言ご挨拶申し上げます。

初めに、本年度の農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞されました稲倉の棚田保全委員会の皆様に、改めまして天皇杯受賞のお祝いを申し上げますとともに、久保田良和委員長をはじめ、委員会の運営に携わってこられた皆様のご努力に心から敬意を表させていただきます。また、先週、天皇皇后両陛下への拝謁を賜れたとお聞きしており、重ねてお祝い申し上げます。

さらに、本日のシンポジウムの開催に当たりまして、公益財団法人日本農林漁業振興会、長野県、上田市をはじめ、ご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

本日午前中、私も稲倉の棚田の現場を視察させていただきました。すばらしい風景を見ながら、久保田委員長から棚田の保全にさまざまな人々がかかわっておられることについてお伺いをしたところであります。

本委員会は、眺めるだけではない、「カカワレルタナダ」をスローガンに、田植えやはざかけなどのお米づくりにかかわる伝統的な農作業はもとより、棚田でさまざまな体験ができるよう工夫をされているとお聞きしております。

ししおどしや棚田CAMP、音楽コンサート、アウトドア活動、棚田を農業体験の場としてだけでなく、これにかかわる方々の創意工夫で企画されたイベントを思い切ってやってみる場としても活用されており、先人が培ってこられた地域の財産を未来につなげていくプロジェクトになっていると思っております。

また、地域の内外のさまざまな人々が棚田に集い、それぞれの人の考えやお立場に応じた多種多様なかかわりを持てるようにされており、これにより活力を生み出されているものと思います。多様性を受け入れることが伝統的なものに新たな価値を生み出し、その維持・発展を図っていくことができるという、今後の社会の在りようもお示しいただいていえるように思います。委員会の活動がさらに多様性を増しながら、将来にわたって継続されていくことを心から期待しております。

本日は、活動内容の発表やパネルディスカッションが行われることになっており、ご参加の皆様方に稲倉の棚田保全委員会の取り組みが広くご紹介されると伺っております。結びに、この会場にお集まりになっている方々、WEB配信でご覧になっておられる方々そ

れぞれに大きな学びがある機会となりますことを心からご祈念申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

続きまして、シンポジウムの開催に当たりましては、地元長野県、上田市の関係者の方々に大変お世話になっております。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。本日は、長野県からは上田地域振興局の柳沢局長に参加いただいております。県を代表してご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】長野県上田地域振興局長

柳沢 由里

ご紹介いただきました長野県上田地域振興局長の柳沢由里と申します。

令和4年度農林水産祭優秀農林水産業者に係るシンポジウムの開催に当たりまして、開催県長野県を代表いたしまして一言ご挨拶申し上げます。

本日は、稲倉の棚田保全委員会、農林水産祭中央審査会委員会の委員の先生方、信夫関東農政局長をはじめ、農林水産省並びに日本農林漁業振興会の皆様のご臨席、またご努力によりまして、ここ長野県上田市で本シンポジウムが開催されますことを大変喜ばしく思っております。ありがとうございます。

本年度、本件の稲倉の棚田保全委員会は、農林水産祭むらづくり部門におきまして、最高の栄誉である天皇杯に輝きました。つい先日は、久保田会長が天皇陛下に拝謁され、その業績の説明をされたと伺っております。私ども長野県といたしましても、稲倉の棚田保全委員会のこれまでの取り組みが高く評価されたということで、本当に心からうれしく、また誇らしく思っております。

稲倉の棚田保全委員会は、平成11年の日本の棚田百選の認定を契機に保全活動が活発化され、その後、棚田米や酒米のオーナー制度、地元企業とのパートナーシップ協定の締結ですとか、棚田CAMPなど、地域内だけでなく、企業や都市住民の皆様とのつながりを強く持たれる中で、棚田の保全とともに、農山村地域の活性化に取り組んでこられました。このため、長野県では、農林水産祭むらづくり部門の表彰につながる、豊かなむらづくり全国表彰に当県の優良事例といたしまして推薦させていただいた次第でございます。

山々に囲まれた複雑な地形を有する長野県では、農山村地域の課題や条件不利性の克服に向けまして、令和5年度からスタートする新たな長野県総合5か年計画におきまして、

輝く農山村地域創造プロジェクトを推進することとしております。豊かな自然、歴史や文化、産業や特産品など、地域が持つ資源を磨き上げ、活用することにより、輝く農山村地域を創造するためには、今回、天皇杯を受賞された稲倉の棚田保全委員会の取り組みは大変に参考にするべき事例であると位置づけております。

本日のシンポジウムにおいて紹介される稲倉の棚田保全委員会の取り組みが全国に広がり、日本各地の農山村地域の活性化へとつながり、実りあるものとなることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。（拍手）

○司会 続きまして、地元の上田市からは土屋市長に参加いただいております。ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】 上田市長

土屋 陽一

ご紹介いただきました上田市長、土屋陽一でございます。

本日は、令和4年度の優秀農林水産業者に係るシンポジウムということで、大勢の皆様によりまして開催されまして、まことにおめでとうございます。そして、このシンポジウムに当たりましては、先ほど来お話がありましたように、昨年、11月23日の農林水産祭式典において稲倉の棚田保全委員会の皆様が天皇杯を受賞されたということで、その流れでこの一連の企画がされました。まずもって棚田保全委員会の皆様、久保田委員長をはじめ関係する皆様に心からお祝い申し上げます。まことにおめでとうございます。

天皇杯を受賞されますと、先ほどお話がありましたように、久保田委員長は、3日の日ですか、天皇拝謁をされております。そしてまた、今日はシンポジウムということで、さまざまな一連の企画がされるのかなと思っております。そういう意味では大変ありがたいことでもありますし、また、素晴らしいことだと思っております。

棚田保全委員会の皆様は、先ほどお話がありましたように、大変多くの関係する先人の皆様によりまして引き継がれてきております。今日も関係する皆様もいらっしゃいますが、そういう皆様の並々ならぬご尽力によりまして、棚田が保全され、そしてまた棚田の保全とともに、地域の活性化を図っていくということで、関係する皆様と心合わせをしていただきながら進めていただいております。

私たち行政も、時々、棚田保全委員会の皆様からは厳しく指摘をされることもあるのですが、しっかりとこれからの周辺の環境整備、駐車場のこととか、あるいはさまざまな広

場の設営とか、行政としても私たちもしっかりと取り組まなければいけないということは肝に銘じております。

今日は、先ほどお話しされました農林水産省関東農政局、信夫局長様をはじめ、農林水産省の皆様もお越しになっています。実は、2月15日に歴史的風致維持向上計画ということで、上田市の計画が認定されました。これは、農林水産省さん、そしてまた文科省さん、そして国土交通省さんの3大臣によります認証でありまして、これからも引き続き、何かと農林水産省の皆様にはお世話になることも多いと思いますが、よろしく願いいたします。

それでは、今日はこの後シンポジウムもありますし、また経過報告もありますが、私たち上田市でも、決して棚田のある豊殿地域のことだけでなく、広く上田市全体に発信していかなければいけないということでもあります。まだまだ足を運んでいない方もいらっしゃると思いますので、上田市民の皆様も棚田保全委員会の皆様と一緒に盛上げていけるように、私たち行政も取り組んでいきたいと思っております。

そして、大切なことは、天皇杯を受賞された稲倉の棚田がこれからの世代に継承されていくということが大事だと思っておりますので、時代、時代ごとに変化はありますが、変化に対応しながら進めていくことが大事だと思っております。私たち行政も先ほど申し上げましたように、これからも引き続き連携をとりながら、しっかりと支援していくことをお誓い申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。本日のシンポジウムを契機に、より一層、棚田保全委員会、そしてまた稲倉の棚田がますます多くの皆様に注目され、発展されることを心からご祈念申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

本日はまことにおめでとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。上田市長には、後ほどパネルディスカッションのコメントーターとしても参加をいただきます。

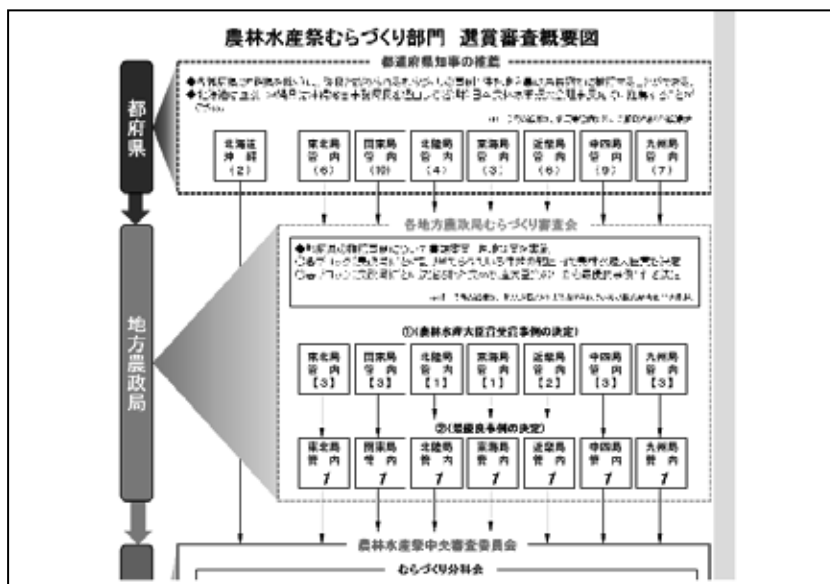
これから議事に入りますが、お配りしています議事次第の記載に若干の修正がございます。パネルディスカッションのコメントーターに予定しておりましたフリーアナウンサーの小谷あゆみさんにおかれましては、先週末に新型コロナウイルスの感染が判明したため、急遽欠席となりました。残念ですが、ご承知おきください。

それでは、議事に入ります。

最初に選賞審査報告を、中央審査委員会むらづくり分科会の主査であります茨城大学農学部教授の福与先生にお願いいたします。

私からは、「稲倉の棚田保全委員会」がどのようにして天皇杯に選ばれたのか、その手続や理由を説明いたします。

農林水産祭むらづ
くり部門では、都道
府県から推薦された
事例から、各農政局
単位で農林水産大臣
賞が選ばれます。関
東局管内では3事例、



北陸局管内では１事例というように、各農政局単位で農林水産大臣賞が選ばれます。さらに、その中から１つだけ、天皇杯選考に向けて俎上に上げられる事例が、各農政局から選出されます。関東農政局だと、最大３事例が農林水産大臣賞に選ばれるわけですが、その中でも、よりすぐりの１事例が選ばれてくるわけです。

今、各農政局から1事例ずつ選ばれるというお話をしました。そうすると合計7つになります。ここから先の話はお役所の事情ですが、北海道と沖縄には農政局がありません。そこで北海道と沖縄からは、別に1事例が選ばれます。そうすると8事例になります。こうして選ばれた8事例



の中から、今度は農林水産祭中央審査委員会のむらづくり分科会において、現地調査対象地区として3事例を選びます。本年度も、第1回分科会を7月26日に実施し、そこでは各農政局等の担当者からプレゼンテーションしていただき、その中から委員で議論をして、3事例を現地調査対象地区として選びました。

7月26日に3事例を選んだ後、8月23日に京都府南丹市、8月26日に長野県上田市、8月30日には新潟県小千谷市にお邪魔して調査させていただいております。そして第2回分科会を9月12日に開催して、現地調査した3事例の中から、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞に、どの事例がふさわしいのかを議論し、「稲倉の棚田保全委員会」を天皇杯に選定しました。

なお、農政局がない北海道と沖縄に関しては、選出されてきた1事例について、第1回分科会のときに農林水産大臣賞にふさわしいかどうかを審査して、同賞の授与が、この段階で決定しました。このように、北海道と沖縄については異なる手続きになっていますが、大雑把に申し上げると、各農政局等から選ばれたよりすぐりの8事例の中から3事例を選び、むらづくり分科会のメンバーが現地調査をさせていただき、その中から天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞を決定したというわけです。

では、どんな審査基準で選賞されるのかをお話しします。ここに挙げた5点が選賞審査基準です。

一つめが「むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況」です。むらづくりでもオリジナリティが大切になります。

次に「むらづくりの合意形成の状況」です。むらづくりを推進していくためには、みんなでやっていくという合意形成が大切になります。かつての農村であれば、合意形成はそれほど難しくなかったのかもしれませんが。しかし、今は、「稲倉の棚田保全委員会」もそうですが、比較的広域で、しかも地域外の人たちも入れながら活動を進めていく必要があります、合意形成も難しくなっています。

それから「合意形成」とかかわりますが、「むらづくりの推進体制、整備・運営の状況」といった点も審査基準の一つになります。

そして、むらづくりの結果としての「地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与

選賞審査基準

- ・むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況
- ・むらづくりの合意形成の状況
- ・むらづくりの推進体制の整備・運営の状況
- ・むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況
- ・むらづくりの豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況

状況」が審査基準の柱の一つとなります。

それから、むらづくりなのですから、産業としての農林漁業を発展させたり、後継者を育成したりするだけではなく、「豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況」も重要な審査の基準となります。

スライドには、令和4年度の農林水産祭むらづくり部門の農林水産大臣賞受賞事例を挙げておりますが、その中から、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞の3賞が選ばれました。天



皇杯は「稲倉の棚田保全委員会」が受賞され、活動内容については後ほど詳しく報告していただきます。内閣総理大臣賞を受賞したのは、京都府南丹市の「下集落支援事業委員会」です。下集落の地域づくりのキャッチコピーは「長寿を目指す里・下～生きがいをもち健康で明るく暮らすむらづくり～」で、むらづくりの原点を見るような事例でした。それから農林漁業振興会会長賞を受賞したのは、新潟県小千谷市の「(株) Mt. ファームわかとち」です。キャッチコピーは「超進化への道標～むらに笑顔と活力を取り戻す!」で、地域の課題をビジネスの手法により解決していくコミュニティビジネスの考え方を取り入れている点が着目されます。

このように、特に優れた事例が3賞に選ばれています。

それでは、「稲倉の棚田保全委員会」の評価ポイントを説明します。

まず評価ポイント①ですが、先ほど挙げた5つの審査基準でいうと「自主的な

稲倉の棚田保全委員会【評価ポイント①】

自主的な努力と創意工夫／地域農林漁業の振興

減農薬栽培を行い、昔ながらの「はざかけ」でゆっくり天日干した棚田米は、豊かな香りとやさしい甘みがあり、地元店舗や直売所等で販売されるほか、上田市のふるさと納税返礼品として取り扱われている。

棚田保全の人手と資金を支えるため棚田オーナー制度を導入し、地元酒造会社と連携した酒米オーナーや気軽に保全活動に参加できる「棚田ファン」等消費者ニーズに合わせたコースを新たに展開し、会員は年々増え(令和4年度133組)、特に都市住民の増加が著しく、都市農村交流の拠点となっている。



稲倉の棚田米



棚田オーナー



酒米オーナー

努力と創意工夫」と「地域農林漁業の振興」に関わるポイントです。棚田保全のためには、棚田の上で何かを栽培して、それなりに経済性を確保していく必要がありますが、まず減農薬栽培が行われ、昔ながらの「はざかけ」でゆっくり天日干して付加価値をつけた棚田米を、地元店舗や直売所等で販売しているほか、上田市のふるさと納税返礼品として取り扱っている点です。また、棚田保全の人手と資金を支えるため「棚田オーナー制度」を導入し、さらに地元酒造会社と連携した「酒米オーナー」や、気軽に保全活動に参加できる「棚田ファン」など、消費者ニーズに合わせたコースを新たに展開し、会員は年々増え、特に都市住民の増加が著しく、都市農村交流の拠点となっている点が評価されました。

それから評価ポイント②ですが、「豊かで住みやすい農山漁村の建設」、「担い手の育成」といった審査基準に関わるポイントです。「棚田オーナー制度」は他の地域でも見られますが、稲倉では農閑期に着目し、冬の棚田

でキャンプを行っています。また、代掻きに合わせて子どもたちが棚田で遊べるイベントなど、棚田の景観、地形を活かして様々な体験交流の機会を作り出している点が高く評価されました。さらに令和2年度からは、松明を持って練り歩く参加型イベント「ししおどし」を、新たな伝統行事として創設しています。このように棚田に関わる多様なイベントを創り出した結果、棚田への観光客は、令和元年度には年間2万人を超え、新たな観光資源になっています。

それから、いろいろなことをうまくつなげている点が評価されています。たとえば上田市が整備した滞在型市民農園の指定管理を受託していますが、そこで受託料を得るだけではなく、そこに滞在している人たちに農作業指導を行ったり、その人たちの棚田利用や交流を通して、将来的には滞在型市民農園利用者の中から地域に移住・定住したり、棚田の担い手になっていく、そういった効果も期待しながら、活動しているということです。そのほか、首都圏や地元の小学校からの学習旅行や農作業体験などを受け入れて、棚田を

稲倉の棚田保全委員会【評価ポイント②】 豊かで住みやすい農山漁村の建設／担い手の育成

農閑期の棚田を活用した棚田キャンプや、代掻きに合わせて子供たちが棚田で遊ぶイベントなど、棚田の景観・地形を活かした体験・交流の機会を創り出している。令和2年度からは、松明を持って練り歩く参加型イベント「ししおどし」を開催し、地域の新たな伝統行事としての定着に努めている。棚田への観光客は、令和元年度には年間2万人を超え、新たな観光資源になっている。

上田市が整備した滞在型市民農園の指定管理を受託しており、農作業指導や棚田を利用した地域交流を通して、将来的には地域への移住・定住や農業の担い手育成の効果も期待される。

首都圏や地元小学校からの学習旅行や農作業体験を受け入れ、棚田をビオトープとして活用し、生物多様性を学ぶ授業の実施など、農業・農村への理解醸成に寄与している。



棚田キャンプ



ししおどし



滞在型市民農園における営農指導



小・中学生の農作業体験

ビオトープとして活用し、生物多様性を学ぶ授業の実施など、農業・農村の理解醸成に寄与しているという点が評価ポイント②になります。

そして評価ポイント③ですが、審査基準でいうと「推進体制の整備・運営」、「合意形成」に関わります。「稲倉の棚田保全委員会」は、地元の方々や、他の地域団体の代表などで構成され、定例会を毎月開催し、農作

稲倉の棚田保全委員会【評価ポイント③】

推進体制の整備・運営／合意形成

棚田保全委員会は、地元住民や他の地域団体の代表などで構成され、定例会を毎月開催し、農作業計画や交流による地域活性化につながる各種取組方針を議論し、合意形成している。

平成30年からは委員の外部募集を始め、関東圏の都市住民や子育て世帯等の非農家層が加わり、構成員の幅は広がりを見せている。



棚田保全委員会のメンバー



会議の様子

業計画や交流による地域活性化につながる各種取組方針を議論し、合意形成されています。平成30年からは委員の外部募集を始め、関東圏の都市住民や子育て世帯等の非農家層が加わり、構成員の幅は広がりを見せています。

私が「稲倉の棚田保全委員会」の推進体制で特に着目している点は、現在の久保田委員長が、委員長として4代目だという点です。これは、リーダーが引き継がれていく仕組みがすでに構築されていることを意味します。全国の地域づくりの事例を見させていただくと、カリスマ的なリーダーがぐいぐい引っ張っているケースが多く、リーダーが歳をとってリタイアしたり、万が一お亡くなりになったりしたら、その地域づくりの存続が危ぶまれることが結構あります。地域づくりというと「リーダー待望論」になってしまいがちですが、稲倉では4代目の委員長ということで、リーダーが引き継がれている点を高く評価させていただきます。

それから最後に、「稲倉の棚田保全委員会」の場合、棚田の保全と、地域の防災・減災とが、強く結びついている点が印象深かったので、お話ししておきます。

中山間地域にあり、生産条件としては不利である棚

棚田保全が地域の防災（多面的機能の一つ）につながるが、強く意識されている。



田を保全する理由の一つが、その多面的機能の発揮です。この点が、税金から支出される中山間地域等直接支払制度の根拠にもなっているわけです。今、ここでお見せするのは、農林水産省のホームページにある「農業・農村の有する多面的機能」です。このようにイラストとして描かれると「なるほど」と思うわけですが、稲倉の場合、都会の人が「上流の棚田でお米を一生懸命つくってくれているから洪水が起こらないのだろうな」と頭で理解するのとは異なり、棚田をちゃんと維持・管理しないと、地域の中で災害が起こりかねないという点が、「自分たちのこと」として、強く意識されていたということです。

どういうことかという、稲倉の棚田は、岩清水という自治会（集落）にあるわけですが、保全委員会はそれを包含するような豊殿地域という一集落を超えた旧村レベルで活動しているわけです。豊殿地域全体から見ると、上流の集落にある棚田がちゃんと管理されずに、棚田が滑ったり、そこで水が貯められずに一気に流れたりしたら、同じ豊殿地域の下流部に洪水被害、土砂災害が起こりかねない。だから「棚田を保全する」ということが強く意識されていました。つまり、「自分たちのこと」としての地域の防災意識が棚田保全のベースになっている。そういった点が特筆されるかなと私は考えます。これも先ほどの評価ポイント①②③に加えて、「稲倉の棚田保全委員会」の活動が高く評価されるポイントです。

以上、私から選賞審査報告をさせていただきました。ありがとうございました。

○司会 福与先生、どうもありがとうございました。

続きまして、業績発表でございます。

天皇杯受賞の長野県上田市、稲倉の棚田保全委員会委員長の久保田良和様、事務局次長の玉崎修平様、お二方をお願いいたします。

【業績発表】令和4年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞

稲倉の棚田保全委員会 委員長 久保田 良和

〃 事務局次長 玉崎 修平

○久保田 それでは、始めさせていただきます。

どうも皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました、稲倉の棚田保全委員会の委員長の久保田良和といたします。よろしくお願いします。私ども、10年ほど前から、地域活性化をしていくには、どうしても外の力を借りなければならないという考え方で、総務省の地域おこし協力隊制度を活用してまいりました。当然、上田市のご理解あってとい

うことになりますが、3代目になります。

○玉崎 3代目地域おこし協力隊の玉崎と申します。もともと棚田オーナーで稲倉の棚田に通っておりまして、棚田ファンが講じて地域おこし協力隊になりました。よろしくお願いいたします。

○久保田 それでは、パワーポイントで説明させていただきます。

ただいま、大変光栄なご意見をいただきまして、去る11月に天皇杯、そしてこの3日に両陛下拝謁をまいりました。これも、国、県、市、行政の皆さん、そして、今日は私の仲間もたくさん見えているわけですが、総合的にそういう形の中でとらせていただいた賞というふうに認識をしております。本当にありがとうございました。感謝を申し上げます。

それでは、始めます。

私たちは、先ほどからお話の中でも出てきておりますが、かかわる、かかわれる棚田ということコンセプトにしております。来ていただくお客さんがただ見て帰るだけではなくて、そこで体験していただいて汗をかいていただく。そして、心身ともに気持ちよくお家に帰っていただいて、また来ていただくということを柱としております。

稲倉の棚田、その歴史と営み
ということで、文献にきちんと
いつできたということが書かれ
ているものはありません。ただ、
昭和の初めに14の横穴式の古墳
があったと言われております。
現在は4カ所ございまして、3
カ所はきちんとしたもので残っ
ております。1カ所は残念ながら

稲倉の棚田 その歴史と営み

稲倉の棚田は、江戸時代に開田されたものと言われるが、畦畔に数箇所ある6〜7世紀頃の横穴式古墳が、太古からこの地に人々の営みがあったことを示しており、その歴史の中で棚田が築かれたと考えられる。

川を挟んで両側に水田が広がる形状は全国的に珍しく、谷間に寄り添うような程やかに連なる姿は、自然を尊重し共生してきた日本の心象風景である。



ら崩れてしまっております。その横穴式の古墳の作り方、製造の過程を見ると、6世紀の後半から7世紀の前半にできたものと上田市の教育委員会の歴史の本には書かれております。そういうことを考えますと、古来そこに生活があった、営みがあったと考えてもいいのではないかと思っているところでございます。非常にロマンを感じることでもあります。

また、地形ですが、真ん中の標高の一番低い650mのところに稲倉川、準用河川が流れておりまして、その両サイドに地形を巧みに利用しまして、幾何学的にできているのが棚

田ということで、V字型の棚田というのが全国的には珍しいと聞いているところでございます。

保全活動につきましては、平成11年（1999年）から当時の農水省の日本の「棚田百選」に認定以来、そこから始まりました。最初は、先ほども出てきましたが、岩清水という自治会が中心になりまして行っておりました。しかし、残念ながら高齢化の中

保全活動について

平成11年の「日本の棚田百選」認定を契機に地元有志が集い日々の保全活動を開始する。地域住民だけでは困難な状況から平成18年に棚田オーナー制度を導入、学校課外学習体験などを進める。

さらに貴重な農業資産を守る活動を全国に先駆け取り組み始める。様々な団体と連携し、農閑期に田んぼ内でキャンプを楽しむ棚田CAMP、岡崎酒造との協力体制による酒米オーナー制度など、さらなる顧客満足度の向上を目標に活動する。



で、豊殿地域の自治会連合会にどうしたらこの棚田を保全し管理していくことができるだろうかというふうに振られました。それが平成15年になります。

そこで検討されて、では、豊殿地域全体で保全活動をしていったらということで、今はまちづくりと言いますが、その前は、豊殿地区の振興会がございまして、その中で平成15年、じゃあ、みんなでやろうよということで、JAはもとより、上田市の農業委員会、もちろん上田市、行政、農業委員会、JA、地域、あるいは個人、そういう方々が一緒になってやり始めたのが始めであります。

しかしながら、時代とともに、それだけではなかなか前へ進めないということで、18年からオーナー制度と学校の課外学習などを取り入れまして進めてきているところでございます。

現在は、農閑期を利用した棚田のキャンプですとか、あるいは、泥んこ遊び、これは、今年



棚田オーナー制度 ～棚田米・酒米～

稲倉の棚田は、棚田オーナー制度を実施に合わせて少しずつ内容を見直している。現在、棚田米オーナーおよび酒米オーナーの受入れを行うが、参加者のご希望と効率的な運営体制を両立しつつ、オーナー数の増加を実現している。

から始めます。キャンプ、あるいは岡崎さんとの酒米オーナー、いろいろなことをやっておりますので、皆さんも時間を作って、もし来れるようであれば、ぜひ足を運んでいただきたいと思います。

○玉崎 それでは、まず、棚田オーナー制度について、稲倉の棚田が行っている取り組み

についてご紹介をさせていただきます。

稲倉の棚田では、棚田オーナー制度を実施するに当たり、来場される皆様の実態に合わせて、少しずつ内容を毎年変えている状況です。今、大きく2つ行われているのですが、1つが「棚田米オーナー制度」、もう一つが「酒米オーナー制度」になります。

こちらは「棚田米オーナー制度」ですが、こちらは3つのプランで展開しておりまして、1つが「棚田エリアオーナー」。こちらは、占有の田んぼを割り当てまして、そちらで作業を体験していただくことになっておりまして、とれたお米も、その田んぼでとれたお米を別で精米してお渡ししております。

一番芯になるのは「棚田サポーター」となりますが、こちらは年会費3万5,000円で、作業日を10日間でご都合のいい日に来てくださいということでご案内しておりまして、日程が重なった皆様と一緒に同じ田んぼで作業をしていただくことで、オーナー同士での交流も図れるということをやっております。

最後、「棚田ファン」というのは、一番ライトなプランで、年会費もお安くしております、気持ちだけ協力したいとか、少しでも作業体験をしてみたいという方に向けての案内になっております。

都合のよい田んぼに案内することで、ベテランオーナーが初心者をサポートする体制が構築されていたり、多様なプランというのは、オーナー数の増加につながっているのではないかと考えております。

次に「酒米オーナー」ですが、こちらは、地元の柳町にある岡崎酒造さんと一緒にやらせていただいているんですが、今、稲倉の棚田は、酒米の長野県のブランドの「ひとごこち」を大体半分の面積で育てております。こちらを岡崎酒造さんに卸させてもらって、

棚田米オーナー 3つのプラン

オーナーは「グループで自分達の田んぼを持ちたい」「小さい子供に少し体験させたい」など多岐にわたり、意向に合わせて3つのプランを用意する。

【棚田エリアオーナー】
占有の田んぼを割り当て、収穫米もその田んぼで育てられたお米を提供します。仲間で取れたお米をいただける喜びと一体感がある。

【棚田サポーター】
作業日程が一時的になった者同士で協力し、その日の都合に合った共通の田んぼで作業体験します。互いに交流が図れる。

【棚田ファン】
少しでも作業体験してみたい、気持ちだけ協力したい方にエグゼクティブの棚田とお米と自由参加の作業体験をご案内する。

都合の良い田んぼへの案内と、ベテランオーナーが初心者をサポートする体制も構築。

多様なプランは、オーナー数の増加につながり、保全活動の貴重な資金源となっている。

酒米オーナー ブランディングと保全

稲倉の棚田で農作業体験し収穫された酒米を上田市柳町にある岡崎酒造の協力により醸された、搾りたて無濾過生原酒「亀齢」をいただける制度である。

【酒米オーナーの特典】

- ・収穫した酒米を専用瓶に瓶詰め体験できる。
- ・全国的に大人気の岡崎酒造社氏と交流できる。
- ・「信州亀齢 稲倉の棚田産ひとごこち純米吟醸」を一般販売前にいただける。



岡崎さんのほうで日本酒に醸していただいております、今、この日本酒もとても人気になっておりまして、「生酒販売、店頭に並びました」といいますと、2週間でなくなってしまうような状況です。そういった貴重なお米でできたお酒を一般販売前にいただけることと、あと、酒米を実際に田植えして、稲刈りしてということで、自分たちで育てたお米のお酒だということで、これもとても人気が出ております。この活動によって、稲倉の棚田のPRとともに、岡崎酒造さんのPRにも貢献できているという、ウィンウィンの状態です。

実際、田植え体験の様子です。こういった絶景を目前に、皆さん、ふもとの上田市街をながめながら田植えをしていただいたり、あと、小さい子どもさんが体験で訪れて、右下の写真は、早乙女衣装を着付けしてあげて、その衣装を着ながら田植えを体験している様子です。



こちらは稲刈り体験です。

一番大きな写真は、地元のテレビ局のアナウンサーさんが体験に来られたときの様子です。

右上、手押しのバインダーも、オーナーさんが来ていただけましたら、サポーターがついて、バインダーの機械操作の体験などもしていただいて、大変好評です。



こちらが酒米オーナーのときの瓶詰め体験会です。

一番大きな写真が、杜氏の岡崎さんです。家族で酒米オーナーになられていて、お子さんも酒樽をながめたりして喜んでおります。

実際、棚田オーナーの推移ですが、コ



ロナが始まった令和2年、令和3年あたりで練馬区報での募集を開始したり、3つのプランを追加して行ってきておりまして、右肩上がりです。今年も、今、オーナー募集が始まっているのですが、去年のオーナー数を上回る勢いになっております。

○久保田 続きまして、私どもの1年で最大のイベントになる「ししおどし」というお祭りを令和になって考えまして行っております。これは、私ども、山の中の棚田です。イノシシの鳥獣害が非常に多いわけでありまして、そのイノシシにひっかけて、

「ししおどし」というお祭りを計画して行っております。

一番のものは、小豆島に中山千枝田というのがあろうかと思えます。そこで「虫送り」という1年の行事がございます。その了解を得て、向こうへ行くことはできなかったのですが、いろいろな情報

をいただいたり、教わりながら、今日、私たちなりの形にして、イベントを行っております。「虫送り」は、『八日目の蟬』という井上真央さんと永作博美さんの映画が昔あったのですが、その舞台になったところでございます。私どもは、そこからいろいろなアイデアを借りまして、鳥獣、イノシシを追いつつ、松明を持って練り歩きます。そして、お子さんも含めて練り歩かして、こんな形でやっております。一番は、練り

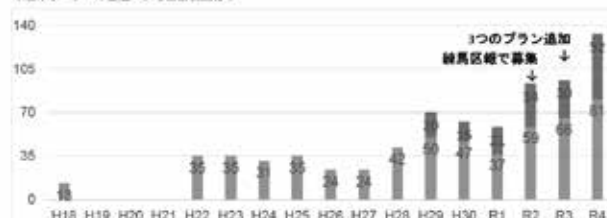
棚田オーナーの推移

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
棚田米オーナー	13	7	7	7	35	35	31	35	24	24	43	56	47	37	59	64	81
週末オーナー																	
オーナー合計総数	13	7	7	7	35	35	31	35	24	24	43	56	47	37	59	64	81
オーナー合計人数(4人/区)	52	28	28	28	140	140	124	140	96	96	172	224	188	148	236	256	324

H18年度から棚田米オーナー開始

H29年度から週末オーナー開始 (H28年度末より募集)

※週末オーナーは地域による募集制限あり



ししおどし祭り

お盆の時期。人々が松明を持ちライトアップされた棚田を練り歩く光景は幻想的。「しし神よ、降りませ、田の神よ、守りませ」との掛け声とともに五穀豊穡と獣害低減を願う祭りとして令和2年度より開催する。

眺める“ほたる火”から カカワルししおどしへ

ししおどし祭りは香川県小豆島の中山千枝田で行われる害虫駆除祈願の「虫送り」を参考に協力いただき、稲倉の棚田が新たな解釈を提示する形で開始。

以前までは保全委員が設置したほたる火を観光客が眺めに訪れる行事だったが、棚田オーナーおよび地元小学校関係者向けに自ら参加いただく祭りとした。コロナ禍の情勢と駐車場の関係により有料限定イベントとして開催している。



歩きまして、最後に花火があつたりします。ほたる火と松明が一緒になって練り歩くお祭りでありますので、そんな形で進めているところでございます。

そして次が、竹提灯と言いまして、最初のころは、お子さんたちも松明を持って一緒に練り歩いていたのですが、お子さんが持つには重いんですね。そ

それで、付近に竹がたくさんございますので、今、掲げております竹提灯をワークショップで作りまして、子どもさん用にこちらの軽いやつにして1周していただくことで考えたところがございます。

そのときの様子の写真ですね。大きいのは松明を持って練り歩く写真と、

右の上が、最後に花火を寄附で集めまして行っております。

○玉崎 次に、「棚田CAMP」をご説明させていただきます。

これは、全国で稲倉の棚田が2017年に初めて行ったイベントになりまして、農閑期、冬の棚田の景色をどうにか活かさないかということで、新たな景観の創出ということで始めました。

実際、棚田CAMPの様子、こういっ

た形になるのですが、ご家族が景色をながめながらキャンプをして楽しんでいただくということで、いろいろお声をいただいている中で、棚田というのは、段になっていますので、前をさえぎるテントがないのがすばらしいというお声をいただいたりしまして、新たな発見にもつながっております。ことしも4月の8、9日で春の棚田CAMPを開催予定です。

棚田CAMPの開催によりまして、アウトドア業界からの取材なども多数いただくこと

令和4年度 竹提灯作りの体験

小さいお子さんにも安心して練り歩きが出来るよう、松明に替わる竹提灯（ちょうちん）を追加。点火式までの間に竹提灯を作る体験コーナーを設け好評だった。



ししおどし祭りの様子



棚田CAMP 農閑期の新たな景色

棚田の中でテントを張りキャンプを楽しむイベントを企画。農閑期における棚田の有効活用と農業生産性とは異なる新しい体験事業として稲倉の棚田より開始、今では全国で多くの棚田地域に広まる。

になりました。そのおかげで、今までは写真撮影とかご年配の方が棚田を訪れることが多かったのですが、30～40代の自然愛好家といえますか、そこら辺で棚田ととても相性がよかったんですが、そういう方々が多く棚田を訪れていただけの機会になりました。



棚田CAMPの様子



また、お手伝いで各方面の大学と学生と協力を得まして、毎回、開催ごとに学生が手伝いに来てくれるという関係性も生まれました。この中の一つで信州ハムさんが、いつも参加者にハムやソーセージを無償提供いただけることをお願いしておりまして、それが実りまして、今回、信州棚田パートナーシップ協定で、信州ハムさんとパートナーを締結することに至りました。

棚田CAMPから 新たなつながりへ

棚田CAMPの開催により、棚田を訪れるきっかけが多様化しアウトドア業界など多方面から取材される事になった。

また参加者は30～40代と従来の棚田愛好者に比べ年齢層が若く、新たな人材として棚田オーナーへの申込み、お田植祭でのコンサート協力、法政大学・長野大学・信州大学、信州ハム株式会社との関係性構築などにつながった。



棚田CAMPは、農閑期の春と秋、期間限定のイベントですが、これを通年キャンプにしていきたいというお声を多数いただいております、宿泊型農業体験エリアとして野菜畑を作りまして、そちらで泊まっていたいただいた方は、野菜をその場でとっていただいて、その場で調理して召し上がっていただけるサービスを始めたりしております。

それは2カ所のエリアでやっているのですが、そのときの様子です。

Campin'稲倉の棚田 通年キャンプへ

棚田CAMPのイベント成功を契機に通年棚田を眺めながらキャンプしたいとの要望を踏まえ、宿泊型農業体験エリアとして楽しめる場を造成。

エリア内の畑で収穫される野菜やハーブをキャンプ参加者に提供し、その場で調理いただく。

【貸切サイト】

東屋・ウッドデッキを有利用可能。また駐車場併設が可能であり、大人数で利用可能。

【テントサイト】

木チップが敷き詰められたサイト。十分なスペースを備え並列して4サイトを確保する。



Campin'稲倉の棚田の様子



こちらは「泥んこASOBI」というイベントも今回計画しております。これは、4月29、30日あたりのゴールデンウィークにやろうかなと今考えているのですが、5月から棚田では代掻きをします。土を攪拌して、止水効果を高めたり、土に空気を送り込んでやるという農作業ですが、この農作業を子どもたちに説明することも兼ねて、泥んこ遊びをしてもらいました。これは去年、保全委員の関係者の小さいお子さんたちを集めてやったのですが、泥んこ遊びをしながら代掻き効果もお願いするという体験事業になりまして、これを今年から一般公開していく予定です。

泥んこASOBI (公開予定)

5月より開始する代掻きは、水を張った田んぼの土を掻き混ぜ止水と土を平滑にする作業である。

稲倉の棚田では、田んぼ内の雑草を手作業で取る作業が非常に大変であり、代掻きは雑草が生えてくるのを抑制する効果として重要。

子供たちに泥んこ遊びをしてもらいながら、一緒に代掻き効果もお願いする体験事業。





泥んこかけっこ



ロープすもう

こちらの写真が、去年、実験開催したときの子どもたちの様子ですが、泥んこの中をかけっこしてもらったりとか、右側のロープをお互いに持って相撲を取ったりとか、非常に楽しめるイベントになりました。

また、みんな泥だらけになった後は、温泉を運んできまして、足湯を作りまして、子どもたちに、最後、足湯で温まってもらうということをやっておりました。これも今年、実は鹿教湯温泉さんとパートナーを組めないかという話もしておりまして、足湯に絡めて温泉の水を持ってこれないかということも企画しております。

こちらが「焼き芋FIRE」というイベントです。これは、11月以降、棚田では野焼きを行うのですが、そのときに地元の方の焚き火の中に芋を放り込んで、おやつにして食べられていたのですが、都会では

焼き芋FIRE

棚田の仕事も一段落した晩秋に、焚火などしたことのない子供たちを招待して、焚火で焼き芋体験を行う。

令和3年度にクラウドファンディング返礼開催の好評をきっかけに、令和4年度に第1回を開催。

焼き芋が出来あがるまで棚田を走り回り風あげを楽しめた。

今後も参加者の様子や声を拾い上げ、さらに充実していく。



なかなか焚き火のできない状況が生まれておりますので、これをぜひ焚き火で焼き芋体験を行う機会としてイベント化しようということで始めました。その前にクラウドファンディングでこういったことをやったのですが、去年、それを踏まえて本開催をしまして、これまた大変好評でした。



大人も一緒に楽しむ様子

子どもたちの笑顔

これは去年の様子ですね。大人も一緒に芋を焼きながら楽しんでいる。子どもたちもみんな楽しんでいる様子です。

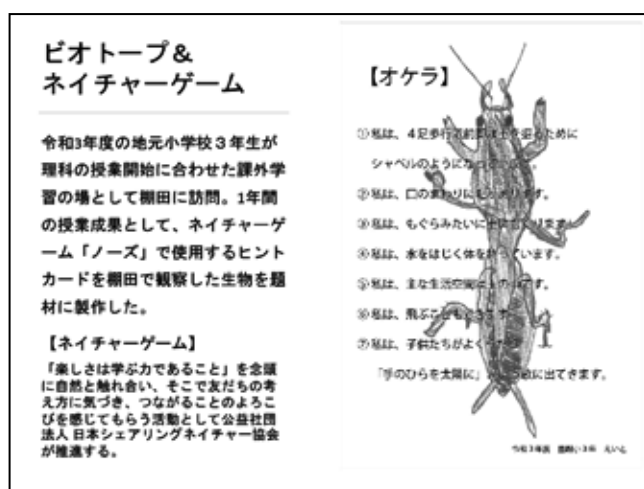
こちらが「ビオトープ&ネイチャーゲーム」といいまして、今、棚田では、地下水が止まらないところで池を作って水を止めたりする工事を行いました。それに合わせて、ぜひこれをビオトープとして生物多様性を育む池にしていこうということで、一緒に造成していくことにしました。



ビオトープ&ネイチャーゲーム

栽培中農産物の棚田における生態を把握するため長野大学の協力のもとに環境調査を始める。また、棚田内に造成したビオトープ池を中心に体験授業を開始した。

その際、地元の小学校3年生の課外授業として、棚田に理科の授業で訪れる機会がちょうど重なりまして、1年を通して一緒に授業をしていくことになりました。そのときに活用したのがネイチャーゲームという遊びでして、私自身がネイチャーゲームリーダーという資格を持っております。



ビオトープ&ネイチャーゲーム

令和3年度の地元小学校3年生が理科の授業開始に合わせた課外学習の場として棚田に訪問。1年間の授業成果として、ネイチャーゲーム「ノーズ」で使用するヒントカードを棚田で観察した生物を題材に製作した。

【ネイチャーゲーム】

「楽しさは学ぶ力であること」を念頭に自然と触れ合い、そこで友だちの考え方に気づき、つながることのよろこびを感じてもらう活動として公益社団法人 日本シェアリングネイチャー協会が推進する。

【オケラ】

- ① 足は、4足歩行の動きをするためにシャベルのように変化する。
- ② 足は、口の裏側に付いている。
- ③ 足は、もぐらみたいに土を掘りまわす。
- ④ 足は、水をはじく体を持っている。
- ⑤ 足は、主な生活空間を土の中です。
- ⑥ 足は、飛ぶには使えない。
- ⑦ 足は、子供たちがよく見ている。

「手のひらを太陽に」のように出てきます。

令和3年度 観察員3名 大いん

まして、遊びながら子どもたちに、「楽しさは学ぶ力であること」を念頭に、自然とふれ合い、そこで友達の考え方に気づき、つながることのよろこびを感じてもらう活動という形ですが、そのゲームの中の一つに「ノーズ」というゲームがあるのですが、このカード

を子どもたちと一緒に作ろうということにして、1年間の課題にしました。

これはどういったものかという、皆さんお手持ちに1枚ずつ配られています、1人の出題者がヒントを1から7まで順番に読んでいく。それでわかった子たちが鼻に人差し指をつけて、わかったら、最後、みんなで答えを言いましょうというゲームですが、最初に答えを出すのじゃなくて、いろいろなヒントから動物を導き出していくゲームです。



これは、最初、見本に子どもたちにしてあげたのを参考にしてもらって、実は、今お配りしていたカードは、設問から絵まで、全部子どもたちが作ったものです。それを最後できたカードをまた子どもたちにきちんとしたカードの形にして配ったという経緯があります。

そのときの様子を取材した映像がありますので、よろしければご覧ください。

(映 像)

○久保田 ありがとうございます。

今日は、このような席に立たせていただき感謝申し上げます。また、稲倉の棚田をこれからもよろしくお願いいたします。ありがとうございます。(拍手)

○司会 久保田様、玉崎様、ありがとうございます。

ここまで2件のご報告にご質問などあろうかと思いますが、パネルディスカッションの中で会場から参加いただく時間も予定しております。その中でお願いいたします。

ここで10分間ほど休憩といたします。

なお、会場の後方に天皇杯のレプリカや表彰状などを展示しておりますので、ご覧いただければと思います。

(休 憩)

○司会 再開の時間となりました。これからはパネルディスカッションです。進行は、コーディネーターとして福与先生にお願いいたします。

【パネルディスカッション】コーディネーター農林水産祭中央審査委員会
むらづくり分科会主査 福与 徳文

○福与（コーディネーター） これから私の方で司会進行します。

意見交換に入る前に、パネリストの皆様を紹介させていただきます。

先ほど業績を発表いただきました、稲倉の棚田保全委員会の久保田委員長と玉崎事務局次長です。

続いて、農林水産祭中央審査会むらづくり分科会の委員であるNHKのエグゼクティブアナウンサーの畠山委員です。畠山さんから自己紹介を。

○畠山（コメンテーター） はじめまして。畠山と申します。よろしくどうぞお願いします。

アナウンサーというと、人の原稿を読んでいるだけと思われるかもしれませんが、私たちは現場に行き、なるべく自分の目で見て、それを放送に乗せていく仕事も担っています。今回は農林水産省のふるさとづくりのための委員にも任命されたことで、実際に去年の秋、こちらの稲倉の棚田取材させていただきました。ここの棚田でびっくりしたのは、1回考えたイベントをさらに毎回進化させているんです。さっきご紹介があったように、「ししおどし」がありますね。イノシシを追い出す。あれは1回考えただけではなくて、子どもさんたちにやらせてみたら、松明は火がついていて、結構、子どもの顔に近い。危ないから、竹を使って竹提灯を作るというふうに進化させている。それが多くの方々の心をつかむ一つのヒントになるのではないかなと思いました。

今日は、自分が考えた、感じたことを、皆さんのヒントとしてお伝えできればと思いますので、よろしくどうぞお願いします。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

そのお隣が冒頭にご挨拶いただきました土屋上田市長です。

続いて、信州大学農学部の内川准教授です。一言よろしくお願いします。

○内川（コメンテーター） 皆さん、こんにちは。信州大学の内川と申します。

本日は、稲倉の棚田の皆様、関係する支援をされているお一人一人の方々、本当におめでとうございます。私の専門分野は、農業土木学、農村計画学ということで、特に棚田地域の整備、保全、中山間地域の持続的な生産、生活および安全環境の整備とか計画技術を検討、研究しております。

私事ですが、大学院を卒業した後、5年間ほど長野県にお世話になりました。そのとき、当時、現在の農地整備課というところですが、勤務したときの1年目に、ここにお座りになっている保全委員会委員長の久保田さんに大変お世話になりました。当時、県庁に久保田さんもお勤めで、新人教育の担当をされていて、私はちょうどそのときに教わったということで、今でも懇意にさせてもらいながらも、少し緊張するという状況です。

また、本年度は、ちょうど卒業研究をする上田市出身の学生がおりまして、この保全委員会と稲倉の棚田を対象にした研究をさせていただきました。その折りにも大変、玉崎さんも含めてお世話になりました。今日はそのときの研究結果も踏まえながらコメントをさせていただきますいなと思っています。

本日、よろしくお願いいたします。（拍手）

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

それでは、パネルディスカッションを始めます。

ここ2年、コロナの影響で中止になっていた天皇皇后両陛下への拝謁が今年復活したということです。そこで両陛下に拝謁された感想と、天皇杯を授与された後、地元に変化があったのかどうか、久保田委員長からお話いただきます。

○久保田（業績発表者） ご案内のとおり、3月3日に両陛下に拝謁をさせていただきました。本当にありがとうございました。3月3日の14時に三番町の会議室という場所、昔は農水省の分室があったところですが、山県有朋さんが所有していた別邸と聞いていますが、そこでみんなで集まりました。その後、バスに乗りまして、途中からパトカーの先導で、皇居坂下門から入りまして、右側に宮内庁、左側に松の塔というところがあるのですが、その前に長和殿という160mぐらいの、よくお正月に天皇陛下がお立ち台で新年のご挨拶をする場面がテレビで出てきますが、そのちょうど真ん中ぐらいのところで記念写真をとらせていただきました。

そして、その後、長和殿の中に入りまして、一通り見させていただいて、バスで1時間半ぐらいかけまして、よく天皇陛下がお田植えですとか、あるいは、皇后がお蚕さんの桑をくれるシーンですとか、そういうところがあるんですが、その場所を見させていただきながら、宮中の参殿を紹介させていただいて、江戸城は太田道灌が作ったと言われているので、今でも太田道灌堀というのがありまして、それは江戸の初期に作ったそのままだそうです。そういうところを見学しながら、最後は、お蚕さんのお家を見させていただきながら、16時に長和殿の中の春秋の間というところで拝謁をさせていただきました。600㎡ぐらい

の大きな部屋でございました。

そこに天皇杯7つがあるわけですが、7つブースがございまして、その前に代表が1人ずつ並びまして、左側から両陛下が入ってこられて、私は5番目、ちょうど真ん中だったものですから、すぐここに両陛下が並ばれて、こちら側から代表が挨拶して、向こうから天皇陛下が、大変な苦勞をされて頑張っていたいただきありがとうございます。農業の振興は大事なのというようなお話をさせていただいて、それから、各ブースごとに一応4分という時間だったのですが、16時から当初は16時35分と聞いていたのですが、結局出られたのが54分ごろだったのですかね。ですから、かなり時間オーバーしたと思います。

ただ1つ残念なのは、写真を撮ることが一切できませんので、話だけで皆さんに伝わらなくて申しわけないですが、同じ空気を吸いながら、順番を端から5番目まで待ってしまして、位置も毎年、7団体が交互に2団体ずつカメラ撮りのところが、ことしは残念ながらむらづくりは真ん中ではあったんですが、回転しているみたいです。またいつかどなたかの団体が多分そこで受けられると思うのですが。自分のところまで待ってしまして、来られて、対面で棚田がある位置、上田市のPRを若干させていただきながら、お話をしました。

それで、一通りこちらからオーナー制ですとか、お米のお話、先ほど出てきましたヒントカード、あるいは泥んこ遊び、そういう一通りのイベントを説明した後に、3つご質問がございました。天皇陛下から2つで、1つは、棚田の作られた歴史はどうでしょうかという話ですが、残念ながら書いたものがなくて、しかしながら、横穴古墳でさっきパワーポイントで説明しましたようなお話を返しました。

もう一つは、農業用水がどういうふうになっているかというお話がございました。農業用水については、上流から非常にきれいな水で2kmほど持ってきていますと話をされて、ご納得されたような感じがします。

天皇陛下は非常に穏やかで、物事に動じないという私のイメージでした。雅子様は、ちょうどそういう話をしているときに、間に入ってこられて、いつもにこにこして聞いていなさるのですが、雅子様曰く、私の娘の愛子も小学校5年のときに課外学習で田植えを経験したと。今でもそのときが非常に新鮮で大事でというお話がしょっちゅう出るというような言い方をされました。ですから、私は、ぜひ稲倉の棚田へも機会を見てご家族で足を運んでくださいとお話をしたら、大変喜んでおられました。

雅子様は目が大きいというか、すばらしい、人を常に引きつけるというか、見る力とい

うのがあって、一瞬、ウッと引き込まれるような感じがしました。同じ空気を吸ってということなので、皆さんのおかげでそういう席に立たせていただきまして、本当に感謝をするところでございます。

語ることはいっぱいあるのですが、時間もございますので、こんなところで、ありがとうございましたということで閉じたいと思います。

○福与（コーディネーター） 地元の変化はどうですか。

○久保田（業績発表者） 地元は、もちろんお会いする人からは、「おめでとう。よかったね」という言葉をいただいて、非常にありがたいと思います。また、地域の外からいろいろな研修ですとか、あしたも静岡県から大勢で来るようになっているのですが、幾つかの研修と、ある団体、これは上田市内の地域の団体に1時間ばかり話をしていただきたいということがあって行ったり、あるいは、先ほど来お話がありましたパートナーシップ協定を私どもは積極的にやっているのですが、いろいろなところからそういうお声がけがきております。ということで、間違いなく変化というのは、いい方向へ向いていることは確かだと思います。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

それでは、ディスカッションに入ります。

これからテーマをいくつか設定して議論します。一つは「棚田保全の意義」についてです。それから「農業生産面」と「生活環境面」です。これらのテーマは、私が先ほど評価ポイントに挙げた点です。まずこれらのテーマに沿って、パネリストの皆さんには、それぞれのお立場からご発言いただきます。そして「活動の原動力」、その後、会場からご質問等をいただいた後で、「今後の展開」について議論して、ディスカッションを閉じたいと思います。

それでは、最初に「棚田保全の意義」について、苦勞した点も含めて、もう一度ということになるかと思いますが、久保田委員長からよろしくお願いします。

○久保田（業績発表者） それでは、説明をさせていただきます。

棚田の保全というのは、皆さん十分わかりだと思のですが、急勾配で、通常のお米づくりをすること自体が非常に困難が伴います。そういう中で、保全をし、維持をし、いろいろなイベントを導入していくことは、非常に大変だということは間違いないですね。できれば、正直言ってあまりやりたくないというのはあります。ただ、いろいろな人間の

立場があつて、豊殿にはしっかりした組織がございますので、そういう中で一生懸命やらせていただいているということになります。

今、私どもで、これは毎年のことですが、1点目は、保全メンバーをどうやって集めるかということが毎年出てまいります。コロナ前とコロナの後では状況がちょっと変わっていきまして、コロナの前まではなかなか集まらなかったですね。ところが、どういうことかわからないですが、コロナになって2年目ぐらいから、毎年私どもは2月の終わり、もしくは3月の終わり、今年は3月25日に保全メンバーのお願いの申し込みの募集をいたします。3年前から非常に集まり出したですね。去年、おとしは30名ぐらい一度に来ていただきまして、もちろんいろいろな話を聞いたり、聞いてもらったりして、全部が全部来るわけではありませんので、その中の3分の1ぐらいの方が保全にかかわっていただいております。

そのときに、私どもの説明するのは、1つは、棚田保全をしていく意義をきちんと理解していただきたい。ですから、単純なアルバイト感覚という言い方はないですが、そういう感覚で来てもらっても困りますということをはっきり言います。棚田を保全していく意味というのはいろいろな意義がございますので、そういうのを一つずつ説明させてもらってやっていく。それが1つです。

もう一つは、予算というのがどうしても毎年かかわってまいります。組織を動かしていくには、当然人を動かす。人を動かすには、当然そこに予算というものがかかわるわけでありまして、日本人的にはあまりお金の話はしたくないですが、でも、これがないと全く運営できません。膨大な費用がかかりますので、それをどうやって生み出すかというのが毎年頭の痛いところです。今は、いろいろな補助事業を入れております。できるだけアンテナを高く張って、令和4年は中山間地ルネッサンス事業、あるいはふるさと棚田支援事業、JAからの融資、また、中山間の支払制度、多面的機能支払交付金、こういうものは当然一つの枠組みの中に入っていますので、こういうものを利用しながら、あとはオーナー制度ですとか課外学習等々、いろいろなイベントを組んで、それでトータルとして1年で、3月31日を迎えるわけですが、そのときに、ああ、よかったなというのを、今、会計のほうとなるように、鋭意努力しているところでございます。おかげさまで、年度の中では全て支払い等は終わりますので、そういう意味で、ある意味、優良団体ということだと思います。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、地元の大学の先生とし

て参加されている内川先生に、農地工学の立場から「棚田保全の意義」についてコメントしていただけるでしょうか。よろしくお願いします。

○内川（コメンテーター） 農地工学、農業土木という側面から、基盤の条件みたいな話を少し申し上げたいと思います。先ほどお話があったように、平坦地に比べても、2～3倍ぐらい労力も時間も要するという話がよくあるわけですが、そのときに、当然、そうすると人を要さなければならないとか、当然費用もという話になります。ただ、その前提として大きく影響しているのが、農地の状況、基盤で、非常に大きいなと思っております。

より具体的に申し上げれば、当然、区画が小さいことはあるのですが、それに加えて、その区画に道路と水路が接していないということです。当然ですけど、区画に道路が接していなければ、耕運機ですとか田植機ですとか刈取機ですとか、そういう機械を直接田んぼに搬入することができない。ほかの田んぼをまたいでいかなければならないとか、あるいは、機械を導入するところに段差が大きくて、かなり無理をして危険もありながらそういう作業をされるということがあろうかと思えます。

あるいは、今度、水路の話になりますが、水路も、直接水路から田んぼに水が入れられないということになると、これは田越しかんがい、田んぼを越してかんがいするという方法になりますが、この場合は、上流の田んぼの排水が下流の用水になるという形で、自由な水の駆け引きがままならない。この辺は非常にご苦労されていると思います。

今年、先ほど申し上げたように、上田市出身の4年生、老野さんという方が、全区画、稲倉の棚田を、歩いてもらって調査してくれて、棚田地域振興法の計画区域内を見てもらったのですが、実際、今言った道路、しかも舗装されたような農道、ここは中山間のハードの整備もしておられるんですが、区画に接しているのは半数強ぐらいなんです。57%。舗装していない道路と接しているところが3割弱ぐらい。全く接続していないところも2割弱ぐらいはあって、こうした状況の中で、おそらく非常に苦労されながら保全活動をしているということになるかと思います。

そしてさらに、水田として維持できている区画は全体の7割ということで、耕作放棄地も残念ながら事実として存在しているということがございます。こうしたところの多く、耕作放棄のところは特にこの区画に道路や水路が接していないという実態がございます。何とかこういうところにマンパワーをたくさん投下しても、非常に苦労してしまう。最低限保全していくべき棚田に対しては、ハード整備も、最低限どこをしていくのかという選別は必要なのかなと感じております。

特に、ただ、そういう農地の整備といいますと、平坦地での大規模な一様になってしまうものを想像してしまいがちですが、棚田においては、当然のことながら、環境、景観にも配慮した形の整備方法が今はありますので、そういったものを含めてご検討する。

とにかく保全に取り組んでいる方々ができるだけ労力を割かずに済む方法も同時に考えていく。また、そういうことができれば、そこに適した小さな機械も新たに開発する必要もたくさんあると思いますが、こういったものをセットで作業環境の改善と作業労力を軽減するための機械が今後おそらく必要になるのかなと、私は学生の卒業研究も見ながら、ともに検討してきたところであります。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。久保田委員長からは、人の確保、金の確保が大変だということ、内川先生からは、その原因として、土地が耕しにくい、小さい、道路がついていない、水も簡単には手に入らないといった点が挙げられました。

非常に面倒くさい管理が必要になる棚田を保全していくということについて、稲倉の棚田を維持していく意義とか、行政のサポートといった見地から土屋市長にお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

○土屋（コメンテーター） 稲倉の棚田につきましては、先ほど冒頭の挨拶でも触れさせていただきましたように、稲倉の棚田の保全はもちろんですが、その棚田を通じながら、地域を活性化していくという大きなテーマがあるということでもあります。30ha、標高差が260mと聞いていますが、640～900mの間を行き来するということもありまして、先人の皆様は大変ご苦労されたのかなと感じていますが、それを地元の今日お越しの保全委員会の皆様、そしてまた豊殿まちづくり協議会の皆様が心合わせをさせていただきまして進めてこられたということで、棚田の保全と国土の保全と言ってもいいですし、また、景観的なこと、あるいは、先ほど映像もありましたように、生物の多様性のこととか、さまざまな点で棚田の持つ力が発揮していただいているのかなと思っています。

そして、棚田百選にも選ばれて、その後、令和元年の棚田地域振興法が成立したわけでありまして、稲倉の棚田の地域振興協議会、これは、長野県、上田市、そしてまた保全委員会の皆様によって組織されていますが、この協議会もしっかりと設立されているということも大事な視点だと思います。

ただ、棚田地域振興法が令和6年までの時限立法と聞いていますが、そういう意味では、その延長をぜひ私たち行政もしていかななくてはいけないなと思っております。

それと、特徴的な形では、先ほど久保田委員長も触れていただきましたが、場所は岩清

水自治会にありますが、自治会だけのことでなくて、豊殿地区全体と一緒に進めていくということが大事でありまして、そういう意味で豊殿地域全体の活性化にもつながっていくわけであります。

そういう取り組みというのは市内でも珍しい取り組みですが、ぜひそういう意味では市内のさまざまな課題を抱えている農業関係者にとっても明るい話題でございますので、大変ご苦勞はあろうと思いますが、前に進んでいただければと思っています。

それと、先ほども触れましたように、次の世代にいかにつなげていくかということも大事でございますので、先ほどの小学生の取り組みも含めまして、多くの方に参加していただくことが大事だと思います。

そして、私も、米米C L U Bというグループで参加している一員ですが、年会費の3,000円は過日納入させていただきましたので、よろしくお願いいたします。

いずれにいたしましても、行政といたしましても、大切な棚田保全につきましても、これから積極的に支援をしていきたいなと思っています。

以上でございます。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

実際、棚田保全委員会を取材された立場から、あるいはむらづくり分科会の委員として、今まで全国の事例を見てこられた立場からでも結構ですが、畠山委員からお願いします。

○畠山（コメンテーター）　マスコミが非常にやりがちなことというのがありまして、例えば棚田で申し上げますと、今、SDGsもはやっていて、棚田ってすごく自然とかかわり合っているよね、維持をしなきゃいけないよねという報道だけで終わってしまうというのが、よくマスコミがやる悪い癖です。そうではなくて、僕は、去年の秋、こちらに入ったときに、なんでこれだけ手間のかかる棚田を維持しようとしているのか。その原点が何なのかということを久保田委員長に聞きたくて取材をしました。そうしたら、北アルプスが見えるところの棚田のてっぺんで、あずまやの中で、座って久保田委員長はこうおっしゃいました。「いずれこの棚田、もしかしたら山に返すことになるかもしれない」と。

「そのときに荒れ放題で返すのは失礼だ」とおっしゃいました。つまり、イベントを行う目的は、まちの活性化だけではなく、原点として、この地域に昔からあったものを大切にしていくという気持ちをベースに、それをどういうふうに守っていけばいいのかということを考えていращやるということがわかったんですよ。

それともう一つ、じゃあ、どうやって人を集めるかというふうに話を聞いたときに、久

保田委員長は、農業をやっていると、みんな同じとき忙しい。雑草刈りのとき、みんな雑草刈りだから、棚田の整備を手伝える人間はほとんどいない。だから、他所から人の力を借りることになる。ということは、お客様としてお迎えするわけだから、ちゃんと礼を尽くしてお迎えしなければいけないと私は思っているのですよとおっしゃった。ここにも人を招くための原点があるのですよね。自分たちの地域というものを大切に守ってもらう。その守ってもらう他所の力に対しても感謝の気持ちを伝える。しかも、さらに、その人たちが飽きないように常にバージョンアップしていく。これが稲倉の棚田の天皇賞の原点の一つだなと私は取材して思いました。

また詳しくは後ほどお伝えします。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

「棚田保全の意義」について、今、一通りお聞きしたところですが、次のテーマに入る前に、久保田委員長から「棚田保全の意義」を外から来られる方々に説明していると言われていましたが、どんな説明をされているのか、ご披露いただければと思います。

○久保田（業績発表者）　先ほども先生のお話で出てきました最後の多面的効果というのが一番だと思います。私の考え方は、川上から川下。川下というのは、新潟県までを言っています。要するに、上から下へそれぞれの地域が自分のエリアをきちんと守る。守るといっているのはいろいろな守り方がありますが、自分のできる範囲で、例えば、ごみの問題から、山の問題、田んぼの問題、みんなそれは共通だと思うのですが、棚田というものにかかわって、棚田を保全することが、まずは地域、私ども岩清水という地域ですが、その生活の安全につながる。それをやらないと必ず、それはわからないですが、地球の100年、1000年の100年というのはたぶん瞬きだと思いますので、その間に崩落してなくなってしまうかもしれない。それがずっと下流へいくわけですから、必ずどこかに悪い影響が出る。だから、とにかくできることをやるという中の一つが保全活動であります。それで、来ていただいた人に、ただお金を稼ぐのではなくて、そういう効果・効用があるということをまず理解していただくというのを一番にしています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

棚田を保全していくとなると、内川先生のお話にもあったように、棚田には、道がついていないところや、水もかかっていないところもあり、そもそも狭いので耕作しづらいわけです。昨年度、天皇杯を受賞した熊本県上益城郡山都町の白糸第一自治振興会もそうですし、何年か前に受賞した岩手県一関市の本寺地区地域づくり推進協議会もそうですが、

昔ながらの維持管理作業をする場合、必ず厄介で面倒くさい作業があり、人手もかかるし、お金もかかります。ここから「農業生産面」のテーマに入りますが、そうした棚田で何か生産して、それなりに稼いだり、人を魅きつけたりしていく手段として「オーナー制度」が稲倉の棚田にはあります。酒米のオーナーも含めて、消費者のさまざまなニーズに答えたオーナー制度が展開されていますが、棚田オーナー制度で工夫された点とか、酒米オーナーについて、先ほど報告いただきましたが、そこでご報告いただけなかったことも含めて、改めてお話いただければと思います。

○玉崎（業績発表者） 玉崎がお答えいたします。

棚田の農業生産面といいますと、農業の生産という言い方が果たして適しているかわからないですが、基本的には、農業体験が主になってくると思うのです。その中で、今、棚田オーナー制度というのは、稲倉の棚田保全委員会を運営していくための大きな資金源になっております。どれだけオーナーを稲倉の棚田に引き込んでいくかというところで、いろいろなイベントだったり、PRだったり、マイナスにならない範囲でやっている状況です。

実際、今、パワーポイントでご説明したとおり、棚田オーナーに関して言えば、3つのプランを展開していきまして、これが幅広くいろいろなニーズに対応していくための措置として考えられているものです。

また、同時に、今までは各オーナー組ごとに田んぼを振り分けてご案内していたのですが、これをオーナー同士も横の交流をしたいだろうということと、あとは、保全委員会での営農の効率化ということも含めて、都合のいい時期に都合のいい田んぼで、お互い交流しながら作業してもらうことで、かなり作業の効率化も図ることができたりしております。

あとは、実際、来ていただく方々に楽しんでもらう機会をふやしていこうと、お田植えまつりを盛大に行いまして、オーナー様の声からも、これだけ盛大にいろいろなお田植えまつりをやられているところはないですよというお声をいただいたりしております。

あと、先ほどお話ししたとおり、いろいろなイベントを今立ち上げておりますので、オーナーさんには適宜こういったことの案内・発信をさせていただいている状況です。

また、酒米オーナーについては、棚田のお米で作った日本酒は、ほかの地域でもなくはないんですが、うちの特徴としましては、保全のために棚田米を使いましたというよりは、岡崎酒造さんも積極的に棚田米を利用した日本酒というのを打ち出して行って、地産地消ではないですが、自分のところで作った上田のお米で作ったお酒ですと、より積極的なブ

ランド化を図っているところもありまして、そういったところではかの地域とは異なるウィンウィンの関係性を築けているのではないかなと思っております。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

酒米のオーナー制度についても取材された畠山さんからよろしくお願いします。

○畠山（コメンテーター）　今、お話もあったように、ウィンウィンとおっしゃいましたよね。岡崎酒造さんにも私はお話を聞きに行ったんですが、酒蔵としても、地元の米づくりとともにあるという考えを持っていらっしゃって、どういったことが起きたかという、稲倉の棚田で作られたお米の付加価値をワンランクアップさせていたんです。それは、お酒にして高く売ること、お米の買い取り価格を高くできるというんです。酒米を普通よりも少しお高く買わせていただいていると酒造メーカーは言っていました。それによってお酒を作って販売していくことによって、ともにウィンウィンの関係ができ上がっていく。これはすばらしいなと思ったのが1点。

それともう一つ、今、時代として、自分で作ったお米でできたお酒というのは本当においしいと感じるユーザーがすごく多いということですよね。誇らしいんでしょうね。自分で作った、しかも、その誇らしさを自分だけではなくてSNSで発信していく時代ですので、多くの方に口コミが広がっていききました。

去年の秋も、岡崎酒造さんが作ったお酒を飲む会があったのですが、そこに集まっている方がほとんど地元ではありませんでした。関東周辺とか、一度この棚田の雑草取りであるとか、田植えなどを手伝った方が、もう一度自分のお酒を飲みにやってくる。この数たるや結構な数に来るわけですよ。しかも、会場からSNS発信をする。多くの日本酒好きの方々が、私もぜひ岡崎酒造さんが作った、棚田が作ったお酒を飲みたいというふうな気持ちを高めていくのですね。

更にもう一つ、付加価値を上げたところで感心したのは、岡崎酒造の社長が「お米は国内商品が主だけど、お酒は海外に飛んでいけるんだよ」とおっしゃいました。つまり、お米を酒に変えることによって、お酒は全世界に売っていける。ワインなんかもそうですね。ワインの産地のところにみんな行きたがる。そういったことがもしかしたらできるかもしれないぐらい、日本酒は魅力あるんだよとおっしゃっていました。これも稲倉の棚田でできた酒米を使った一つの効果かなと思いました。

以上です。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

農業生産面について、専門家の見地から内川先生、よろしくお願いします。

○内川（コメンテーター） 農業生産面が非常に難しいということ。これは言わずもがな
というか、皆さんそう思っているところで、実際、絶対量の問題といいますか、棚田の場
合はそこがどうしても存在している中で、産業論的な位置づけとしての農業として捉える
ことがどこまでできるのか。もちろん、「自分たちだって農業をやっているよ！」とおし
かりを受けるかもしれないんですが、経済的に成立するという。特に農業の部分で成
立するのかというところを考えて、今年の卒業研究をやってくれた結果なのですが、稲倉
の棚田の各種の活動ですとかイベントの収支を見させていただいたんですね。そのときに、
収入面では、当然、すごく活動もされて、イベントも素晴らしいですが、それによるもの
が全体とすると2割強ぐらい。そして、先ほどもいろいろな補助金とかも活用されている
ことですが、補助金、交付金等によるものが3割ぐらい。そのほかに、もちろん、いろい
ろなご苦勞をされていて、クラウドファンディングだとか、お米の販売もされておしまし
て、そういうところによるものが4割強ぐらいという感じで、評価として当然しないわけ
ではなくて、誤解のないようにですが、今回のイベントとか、そういうことも大変すばら
しいことだし、それによるいろいろな効果は収益とは別にあると思うのですが、収益とい
うふうに見ると、やはり限定的にならざるを得ないところがあるのかなと感じているとこ
ろです。

そういう意味で、先日もこの保全委員会のお2人とも話していて、今回の受賞によって、
稲倉みたいにたくさんイベントをやればいいんじゃないかというふうになっていくことが
どうなんだろうという話もしていて、必ずしも収益につながると考えられてしまうと……
だよねという。もちろん、その意味、意義はほかのところにも当然あるのですが、むしろ、
こういう多くの取り組みをしてきたからこそかかわれるという今回の評価は当然変わらな
いわけなんです。

少し話を戻して、産業論的農業というふうに考えることが、そうなるとどうなんだろう。
この時代、今、戦争があったり、パンデミックがあったり、そして、そういう影響もある
中でフードショックも懸念される時代において、私はもう少し違う観点もあってもいいの
かと正直思っていて、身近な農村のこうした、かつて、先ほどもイベントありきではなく
て、畠山さんのお話にもありましたが、地元のものを大切にする。あるいは、持続してそ
ういう農地が存在している。地元のすぐ近くに棚田が存在していることは、ある種の地域
のセーフティネットみたいなものの存在に変わっていく可能性もあるのかもしれない。そ

ういうものとして大切に保全委員会の人たちが守ってきていただいたことが別の形で生きる時代もくるのではないかと、そういう思いもちょっとして、この不安定・不確実な時代におけるところの棚田の価値があるのかもしれない。あまりまとまっていないですが、そんなふうな思いもしているところです。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。重要な論点かと思います。

オーナー制度は体験が主で、それがある程度は資金源になっていることと、酒米オーナー制度ではウィンウィンのビジネスモデルが見えつつも、すごく売れるといっても棚田で生産できるお米の量は限られてしまう。本格的なビジネスに展開していくには自ずと限界があり、さりとて、ただ守るというだけでなく、それなりに収益を上げつつ、うまく回していくような仕組みを作っていく、これは結構難しい課題ですが、そういった点が明確になってきたのではないかと思います。

それで、人や金を回しながら、地域の棚田を維持していくに当たっては、棚田の維持だけではなく、都市と農村の交流や、新たな伝統行事など、いろいろな活動をされているわけですが、次に「生活環境面」にテーマを移らせていただきますが、棚田を活用した環境や景観維持、そういったものにかかわる活動について、まず保全委員会の久保田委員長からお話しいただければと思います。

○久保田（業績発表者）　大変難しい話にだんだんなってくるのですが、基本的に棚田をいろいろな形で維持していくことの一番の原点というのは、営農をしっかりすることにしかないですね。私どもの棚田は、多分、今現在見ていただくと、いろいろな棚田が日本にはたくさんありますが、結構きれいな棚田と自負しております。それは、草刈りから始まって、いろいろな美化を積極的に取り入れていますので、そういう意味で、それをきちんとやらないと、次のステップに行けないと考えています。次のステップというのは、棚田の保全があって、初めてそこにいろいろなイベントが生きてくるよという考え方です。

棚田を保全活動することは、多面的機能の増強につながりますので、ダムの効用、国土保全、自然涵養、そういうものが当然あるわけで、それにはとにかく、古い考え方かもしれませんが、まず、棚田をきちんとしましょうよというのがベースにあります。

そういう中で、今度、先ほど内川先生からも出ていたのですが、整備面。棚田と基盤整備というのは非常に相反するものがあって、どこまで整備する。あるいは、整備し過ぎてしまうと棚田ではなくなってしまうみたいなイメージがありますので、コスト主義で効率だけ追求していくと、世の中から裏切られるような、こっちが裏切るんですかね、そうい

う形になりますので、やりつつも、いろいろな整備をしつつも、棚田をきちんと保全していくことを頭の真ん中に置いてやっていかないと非常に難しいことだと思います。現に、今日もやっているのですが、用水の不備なところを直すとか、比較的軽微な保全活動を中心にやっております。

いずれにしても、棚田が人の手が加わった自然、半自然草原と言うみたいですが、そういうことをきちんとすることで、生態系の維持につながり、それを通年繰り返すことで継続ができて、そしてそこに人が集まってイベントをすると。

イベントは、先ほども信大の生徒が棚田の3年度のことをベースにしてシミュレーションしてくれたのですが、イベントをしてもうかることは残念ながら一つもないんですね。ただ、情報発信をお金にどういうふうにカウントするかはわかりませんが、やるのが大事ですね。物をやると、そこに反省といいますか、失敗が必ず出てきます。その繰り返しですね。ただ、やらなければ、失敗も起きないし、成功も起きないということも間違いなく言えるのです。その繰り返しをしながら、どこかに落としどころを見つけながら、1回やったからといって、それが完結することは何もないと思っていますので、失敗はあるけれど、それが2年、3年後に花開けばいいという、非常に気の長い地道な対応になります。そういう繰り返しのおかげで、今回の天皇杯をいただいたことはそういうことと理解していますので、非常に難しいんですが、コツコツとやっていくしかないという気がしています。

○福与（コーディネーター） イベントは試行錯誤の繰り返しで、それで儲かるわけではない、情報発信なのだ、ということですが、都市と農村との交流、キャンプ、ししおどし、クラインガルテンでの農業技術指導について、何か、「実はこうなんだよ」というところを玉崎さんからよろしくお願いいたします。

○玉崎（業績発表者） イベントというのは、都市と農村の交流が重きになると思うのですが、棚田CAMPは、アウトドア好きの方が皆さんいらっしゃって、アウトドアの好きな方は、あえて面倒くさく大変なことをやるんですね。例えば、火をおこすのにも火打ち石を使ったり、そういったことを楽しむみたいなことが、棚田の農作業体験も、平地の田んぼよりも非常に大変な作業がたくさんあって、そこら辺と非常にシンパシーを感じる部分があって行ったという経緯もあります。

また、棚田オーナー制度の受け入れなどに関しても、地元の農家だったり、あと、高齢者、あとはベテランの棚田オーナーさんが初心者の方を指導したりとか、そういう活躍の

場があるのはとてもいいなと思ってまして、そこで互いのモチベーションの向上につながっているといった環境もあります。

あと、ビオトープもそうですが、地域の子供たちが棚田に訪れて、いろいろな棚田の知識を知って帰っていく。その楽しい記憶というのが結果的に地域愛へと結びついてくれな
いかなと思ひまして、その三位一体が一つ地域を元気にしていく活力の源につながっていく
のではないかと、イベント一つやるにも大変なことです、そういうことを
念頭に行っているという現状です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

内川先生、専門家の見地から、今度は農地工学というよりは農村計画学とか地域づくり
の観点からご発言いただければと思います。

○内川（コメンテーター） 先ほどちょっと申し上げた話にもつながるんですが、この選
賞においても、今日、先生から、防災に関する多面的機能を強く地元が意識されているこ
とが評価されているという話がありましたが、加えて、先ほど申し上げたように、例えば、
こういう時代における地域の食も守るところにつながっていくような気がしてまして、
そういう土台といいますか、必ずしもお金もうけというところにはすぐにはつながるわけ
ではないが、いざといったときの、セーフティネットとしての農地、農村の棚田というも
のが意義を持つところには、非常に重要な側面があるのかなと思っております。

実際、そして、農村部においても、中山間地域と言われるところすら、8割、9割は
非農家なわけですね。実際に農業に直接携わっている方々がごくごくわずかになってきて
いて、一部の方が担っている状況になっているわけで、そういう意味で、こういう地域の
周辺の非農家の方々とも実際にたくさん稲倉の場合はかかわっておられますが、ここをさ
らにいろいろな意味で強化していくことがあると、より、さらに一歩進んだモデルという
か、すばらしい形になっていくのではないかと期待するところです。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

都市・農村交流とか、さまざまなイベントを行っていることに関して、畠山委員から取
材した立場からコメントいただければと思います。

○畠山（コメンテーター） 取材して、もう一つ別の観点で感じたのは、イベントを考え
るときにも、地域の方々の昔からの知恵がどこかに体の中にしみ込んでいるのかなと思っ
たことがあったんですね。それはどういう場面かと申しますと、あそこの棚田に流れ込ん
でいる水は、非常に標高が高いので冷たいです。冷たいまま棚田に流すと、作物の生育は

よくないので、かつての人はどうしたかという、その水を一旦貯める場所を作って、太陽に当てて温めてから棚田に流すという工夫がされているんですね。つまり、電力や火力などを使ってコストをかけて水を温めるのではなくて、お天道様の力を借りて、コストをかけずに水を温めて生育をよくしているという知恵が地域にあったのです。

今回、いろいろなイベントを考えていらっしゃる稲倉の棚田の保全委員会の皆さんの知恵というのも、そこにすごく近いところがあって、例えば、先ほどの紹介にちょっとありましたが、泥んこ遊びの後に温泉をとという話がありましたよね。この辺りは平場のほうでは温泉も結構わき出ているので、その温泉に浸かっていただくというアイデアはすごくいいと思います。ただ、どうやって棚田のところで温泉のお湯を張るのかというところですが、施設を作るのだったらコストがかかりますよね。でも、久保田委員長のアイデアの中には、いや、そんなの簡単だと。リンゴ箱を四隅に置いて、その間にブルーシートを敷いて、そこにお湯を入れれば十分足湯になるとおっしゃるのですよ。イベントでもうからないというお話がありましたが、もうからないならば、コストをかけずに運用していけばいいわけですよね。そのあたりの知恵というのも何かこの地域には血として流れているのではないかという感じがしました。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。さまざまな新しいイベントにも地域の知恵が底流としてあって、そこからポッと出てきているのではないかというお話でした。

こういった活動をいろいろとされているわけですが、「活動の原動力」というのは何かについて久保田委員長からお話をいただければと思います。

○久保田（業績発表者） 3つぐらい考えられると思いますが、1つ目は、稲倉の棚田の保全というものが豊殿地域に組織としてきちんと位置づけられているのが一番大きいことだと思います。1993年（平成5年）になりますが、当時の自治会長の皆さん方が中心になって、豊殿地区振興会を作っていただきました。これは、平成28年にまちづくり協議会になったわけですが、その前身に当たります。その中でいろいろな豊殿地域のことを検討していただきながら、もちろん、地域、あるいは振興会にしろ、自治連にしろ、お金を持っているわけではありませんので、いろいろなことはできません。

ただ、いろいろな活動を通して、地域のいろいろな課題を一つの形にしていくということで、豊殿地域にはそういう意味ではいろいろなものができています。ローマンの診療所

ですとか、多機能の施設、あるいは hinata bocco（ひなたぼっこ）という福祉の施設、あるいは循環バス、あるいは、たしか学校の体育館もそういう中の一つだったと思います。そういうことを私の未来、10年を一区切りとしますと、ちょうど30年かかっていますが、10代、10代、10代の人たちの代表者の皆さんがそういうことをきちんとやっていただいて、我々に引き継いでいただいたと。当然、私どももまた次の代に引き継いでいくわけですが、そういうリレーがされてきているということは一番大きな安心してできる一つになろうかと思っています。

要は、棚田保全をしていかなければいけないというのは、平成15年（2003年）に既に上田市と当時の我々で市民の森周辺総合開発計画というバイブルがあるのですが、その中にきちんと出てきます。そういうことの位置づけが一つしっかりしていることが、今日につながっていると私は理解しております。

それと、どうしても組織をこれから活動していくには人がかかわるわけですが、2点目は、女性の登用だと思っています。もちろん男性も必要ですが、農業というのは非常に女性に向いているというのが私の個人的な考え方です。粘り強く丁寧ということがありますので、女性の皆さんをできるだけぜひご参加いただいて、中核をなしていただきたいと思っています。

3つ目が、人、関係人口、これは自分たちの中の人口もそうですが、オーナーにしろ、都市交流、学校課外学習にしろ、関係人口をどんどんふやしていくことが大きな課題と思っています。どれもおかげさまで、少しずつではありますが、着実に伸びていることは確かでありますので、こういうことを中心に考えて、できるだけかかわっていただく。そういうことをコンセプトとしてこれからもやっていきたいと思っているところでございます。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

お待たせしました。市長さんから見て、稲倉の棚田保全委員会は上田市の中では特殊なものなのか、それとも上田市ではよくあるものなのか、その点も含めて、活動の原動力について、どう見ておられるのかをお話いただければと思います。

○土屋（コメンテーター） 原動力につきましては、先ほども皆さん触れていますが、稲倉の棚田の保全委員会はもちろんです、先ほど久保田委員長が触れましたように、豊殿まちづくり協議会がありまして、その中の振興部会に位置づけているということですね。そういう強みはすばらしいと思いますし、先ほども触れましたが、稲倉の棚田は岩清水自治会の課題だったと思うのですが、自治会一つのところで課題解決にはなかなか難しいわ

けですね。それを豊殿地域、歴史的に見れば、豊里村、殿城村、その後、豊殿村になりますが、そして上田市になっていくのですが、そういうある意味での地域のつながりが非常にある場所ではないかなと思うんですね。それで、岩清水自治会のことですが、みんなでやろうじゃないかと。まさに地域の財産として棚田を守っていこうじゃないかという熱い思いが原動力の一つではないかなと思っております。

それと、棚田保全委員会でも先ほどから触れていただいておりますように、棚田のパートナーシップもそうですし、また、大学との連携。先ほどの内川先生の信州大学、そしてまた地元の公立大学法人の長野大学も関係しているということ、そして、企業の皆様のパートナーシップの協定も大変後押しになっているのかなと思っております。

そして、それぞれをつないでいくという役割が、今日、玉崎さんがいらっしゃいますが、地域おこし協力隊の皆様。3代目が玉崎さんですが、それぞれ、協力隊の皆様も熱い思いを持って棚田を保存していこうという皆様方の志といいますか、熱意が大きな原動力になっているのかなと思っています。

さらに、それが今日もこういう形で天皇杯を受賞されたという意味もありますが、長野県の皆様、そしてまた国の農林水産省の皆様も、このシンポジウムに駆けつけていただいているということは、原動力の一つなのかなと思っております。ですので、上田市全体の中でも豊殿の棚田保全委員会の活動は、地域挙げての取り組みだと思っております。

ただ、冒頭で触れましたように、この動きを上田市民の中でもなかなかまだ行き渡っていないということもありますので、それにつきましては、ことあるごとにこの動きを私たちも広めていきたいと思っていますし、また、保全委員会の皆様も、あるいは豊殿まちづくりの皆様もまたつなげていただければ、発信していただければありがたいなと思っています。

以上です。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

活動の原動力について、畠山さんからご発言いただければと思います。

○畠山（コメンテーター）　玉崎さんという方は、もともと東京でいらっしゃったんですよね。東京から来て、棚田を手伝いながら、こちらのほうに憧れて来たと伺いましたが、稲倉の棚田のイベントなどの発想とかは、都会の人たちの感性と、地元の方々の思いというものがものすごく話し合われていて、融合しているという感じがするのです。

例えば、棚田キャンプ。棚田というのは、本来、農作物を作る畑、水田ですから、そん

なところでキャンプをやるなんてとんでもないというのが多分地元の人たちの考えだと思うのです。ところが、東京の人たちから見れば、段差があるので、目の前にテントが張られたって、見通しいいじゃん。電気はないと地元は言うかもしれないが、電気がないからこそ、満天の星空を仰げるんだよというのが都会の考えだと思うのです。それをお互いに地元でよく話し合っって一つのイベントを作っていく。それが多分、新しい稲倉の棚田のイベントづくりのもとになっている。つまり、地域だけの考えではない。都会だけの考えの押しつけでもない。そこの部分がうまく融合しているからこそ、まちが活性化していく。稲倉が活性化していく。そういう感じがしています。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。

市長さんの話、畠山委員の話をお聞きしていると、やはり多様な主体と、あとは旧村とか小学校区レベルのやや広域の地域が結集して、きっちりと組織を作っているところが肝かなと考えています。

いろいろと意見とかコメントが出てきたところで、このあたりで会場からのご意見とかご質問をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○会場（鮫島）　今日は、大変貴重なお話をたくさん聞かせていただいて、大変勉強になりました。私は、隣の東御市に住んでいる鮫島と申します。

よく稲倉の棚田のところも行ったりすることもあって、私のところに遊びに来た人、棚田に興味がある人を連れて行ったりもして、楽しく見させていただいていたということで。よく考えてみると、この棚田の景色は、実は守られている景色なんだなということを今日改めて感じたのです。行く人は、日本の原風景、田んぼの原風景みたいなのが棚田には残っていて、本当にそれを楽しんでいるだけですが、今日のお話を聞いていて、それを守るためにどれだけのことをされているか、思いを新たにしたいというのが今日の印象です。

それで、私は久保田委員長のお話の中に、まず、棚田といっても、営農としての位置づけがとても重要だということで、イベントというのは確かにいろいろあるが、実はそんな収益事業ではなくて、そこを有名にする、地域を盛り上げるという意味とか、都会と地域をつなぐという意味で大変重要だということもわかったのですが、営農としての棚田というのは、棚田で米を作るというのは、ほかのところに比べればものすごく大変なことですよ。ですから、労力と時間と経費がかかる。そうすると、営農ということを考えたら、そこでできたお米をいかに高く売るか。ブランド化して、それから当然クオリティも高くなければいけないですが、高く売る戦略というのは絶対必要じゃないかと思うのですが、

その場合、高くても買ってくれるところはどこかなという、有名な料理屋だとか、旅館だとか、料亭だとか、特別な思いのある消費者ですね。そういうものをつかんでいくことがすごく大事じゃないかなと思うんですが、そういうことは何か活動の中でやられているのでしょうか。

○福与（コーディネーター） 久保田委員長、具体的にお願いします。

○久保田（業績発表者） 1つは、残念ながら、平地と違いまして、お米の収量そのものが全体的に少ないですね。例えば、この辺の有名な塩田平ですと、10a 当たり10俵が普通だと思うのです。私どものところは10a でとれる量が半分以下ですね。まず一つそういう現実があります。

それで、今言われたように、できるだけ戦略でお米を高いところへ、もしそういうところがあるとするならば、買っていただく、あるいはそういうほうに持っていきたいということはもちろんあるのですが、一定の量をきちんと相手方に責任を持って出さないと、なかなかちょっとそこが難しいところですね。

ご案内のとおり、農業というのは毎年浮き沈みがありますので、とれる年、とれない年、同じことをしてもお天道さん次第みたいなところがありますので、言われることはもっともですが、なかなかそこまで踏み込めないのが実態ですかね。

それと、棚田へ来ていただいたお客様も、できればそこでいろいろな対話をしながら販売していきたいということがありますので、そこを重視しています。「余った米」という言い方はおかしいですが、そうしますと、何程も余らないんですね。例を言いますと、今年はそれぞれお礼ですとか、やるオーナーの皆さんにやるべきところへやって、最後に残った、うちが自由に使えるお米が30袋ぐらいです。30袋ですと900kg ぐらいが自由に使えるお米。それをどういうふうにするかということになります。うちがイベントで使うお米も必要ですし、いろいろ出てくると、今言われたように、高く売のお米がなくなってしまうというのが現実です。量とすると。ですから、質を上げる、品質を上げる、あるいは量を上げるという戦略は、去年からやり始めています。肥培管理をしながら。

○会場（鮫島） あと、お酒とタイアップしたというのはすごいなと思って。それはすごく大事なことで、食品の場合、原料というか、物を売るというのも当然価格を上げるということは大事ですが、加工することによって価値はものすごく上がると思うのです。上田市にもありますが、東御市はワイナリーがすごく多いですが、べらぼうに高いワインが本当によく売れていますよね。だから、ああいう付加価値のつけ方も、営農を考えた場合、

ものすごく大事なのではないかと思いますが、その辺はいかがでしょうか。

○久保田（業績発表者） たまたま酒米につきましては、柳町にあります岡崎さんという1665年に開業された蔵がありまして、小さい蔵ですね。岡崎さんご夫婦は、長年私たちの棚田のオーナーをずっとやっていただいていたいました。そういう関係もありまして、うまくはまったいい例ですね。岡崎さん曰く、酒米を、極端なことを言うと、全部作れと言うのです。全部作れば全部買うよと言っていると思います。価格も、ここでは言いませんが、通常、JAの価格は1俵で1万1,000円ぐらいがこの辺の相場です。それがその倍以上の金額で買っているというのが実態であります。ですから、うちにとっては非常にありがたいお話ですが、先ほど言いましたように、いろいろなおつき合いもあるし、棚田としていろいろなところとかかわっていかないといけませんので、どうしても半分、半分が限界ですね。ですから、今、とにかく収量を上げることを精いっぱいやっているところです。

○会場（鮫島） どうもありがとうございました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。まだまだ会場の皆さんにお聞きしたいところですが、お約束した時間になってしまいました。申し訳ありませんが、また個別に聞いていただければと思います。

それでは、稲倉の棚田保全委員会の「今後の展開」について久保田委員長、玉崎事務局次長、それぞれ一言ずつお話しいただければと思います。

○久保田（業績発表者） 今日はどうもありがとうございました。今回、素晴らしい賞をいただきまして本当に感謝をしているところですが、今後の展開ということで、じゃ、どういうふうにしていくかということになるかと思いますが、基本的には、全く変えるつもりはございません。今までやってきたことを地道にやるのが1つで、そこに磨きをかけてやっていきたいと思っています。まだまだ今やっていることが100%ではありませんので、それを先ほど言いましたように、お米も質と量をアップしていかなければいけないし、イベントもお客様、オーナーの皆さん、あるいは一般の皆さんを含めて、どういうニーズに応えられるかということ、いつも方向を見ながら展開していきたいと思っています。ところでございます。

いただいてから、本来ならば、うまく変わりつつ、いろいろな意味でいろいろな情報としていろいろな方から、こういうことをできないか、こういうことをどうしようかと毎日メールが入ってくるようになっております。それは非常にありがたいわけですが、こちら

側でやれる人の限度がありますので、新規の事業は1～2年に1つ入れていく。今までやってきたことに磨きをかけるということを重視してやっていけばいいかなと私は思っているところでございます。

○玉崎（業績発表者） 子供の体験事業による青少年の育成とか、農福連携の強化、こういったことを地元へ還元するつもりで次の協力隊に受け継いでいけたらなという思いであります。

あと、先ほどお米を別の形で6次産業化して販売ということも質問がありましたが、現在、棚田里山関係の別のアプローチで商品展開も増やしていこうと思っております。どうしてもお米だと、収穫して新米で、秋口から春先にかけてしか販売するものはないので、年中棚田に訪れてくれている方が何かしら商品を手にとってもらえるようなものという事で、今、商品展開はしている最中になります。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

今度は市長さんから、稲倉の棚田保全委員会の取り組みに対して、上田市全体への展開も含めて、今後の行政のかかわり方について、お話ししていただきたいと思います。

○土屋（コメンテーター） 稲倉の棚田につきましては、行政といたしましては、先ほども連携という表現がありましたが、常に地元の皆さんに寄り添っていくという思いであります。これは、引き続きその思いであります。

それと、保全委員会には上田市からも1人事務局員を務めております。そういう意味でも連携も図っているということです。

それと、棚田保全委員会の皆様には、移住交流の関係のアドバイザーを委嘱させていただいておりまして、移住交流の相談の窓口にもなっておりますので、また引き続きお願いしたいと思っております。

それと、棚田の近くにクライנגルテンが9棟ありますが、ここの指定管理もお願いしておりますので、また引き続きよろしくお願ひしたいということでもあります。

それと、棚田につきましては、今年は棚田サミットが和歌山県で行われると聞いておりますが、いろいろな関係の皆様からは、令和6年には長野県で、また上田市で棚田サミットをやってくれないかというお話がありますので、国の皆様、県の皆様との協力、そして地元の皆様との協力のもと、それに向けて進んでいきたいと思っております。

以上でございます。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。令和6年には棚田サミットという

お話もあるようです。

それでは内川先生、畠山委員から、今後の展開にむけての課題とアドバイスをよろしくお願いします。まず内川先生から。

○内川（コメンテーター） 今後どんな展開を進めるにしても、私の専門でもあるのですが、整備といいますか、基盤の部分の充実は必要かなというのが1つあります。例えば、エネルギーが今非常に高騰して、住宅一つとっても、エネルギーをどんなに投入していても熱が漏れてしまうような家に住んでいけば、どんなに投入しても意味がないと言ったら何ですが、ここも、農地に関しても、どんないろいろな取り組みをしようとしても、やはりひっかかってくるのは、持続的な耕作を維持するための環境整備、これが僕は必要だと思います。先ほど冒頭に申し上げたようなことを少し明確にしながら、上田市さんもらっしゃいますし、県も今日は来ております。国もありますが、さらなるそういう部分の支援が、棚田地域振興法もできましたが、そういう中でより工夫して実施する事が必要なのかというのが1点。

2つ目が、これは先ほどちょっと話をしましたが、少しで結構ですので、不安定な時代において、地域の農地が地域のものとして地域の人々にきちんと支えになるという方向も模索していただけるといいなという、これは希望というところで2つ目のコメントとさせていただきます。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

畠山委員、よろしくお願いします。

○畠山（コメンテーター） 今、無意識の行動をどうやって促すかという研究が流行っているようです。例えば、ライオンの口みたいなものがある「ローマの真実の口」のように、ついつい手を突っ込みたくなるとか、東京の渋谷にある東急ハンズというところには、階段の段差の部分に、一步一步上がると何カロリー消費するかという数字が書いてある。そうすると、エレベーターでなくて階段を上がっていくという人の自然な行動を促すことにつながるんだそうです。

今回、稲倉の棚田を訪ねてみて、町場に下りたくなった理由は、棚田で作ったお米がお酒になって、町場の酒屋にあるということです。何となく自然にそっちに足が向くんですよ。行ってみたら、そこは岡崎酒造さん、先ほど名前が出ていましたが、昔ながらの酒蔵で、しかもその周辺のまちづくりがすばらしい。旧北国街道沿いの柳町というところでし

たが、石畳があって、漆喰造りの家並みがずっと並んでいる。うだつが上がっているような昔ながらの家並みがずっとある。このことは、事前に足が向いたことによって発見できたんですよね。その発見のうれしさというのは家族にも言います。そうすると、家族が「行きたい」となるのです。まちがPRをしなくても、自然に2点がつながったことによって、たまたま稲倉の棚田の酒米を使った酒蔵がまちにあったことによって、自然に人の行動、アクセスルートができていった。こういったものができれば棚田の集客効果が、上田全体に広がっていくと思いました。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。

私の進行がまずくて、お約束した16時どころか16時10分になってしまいました。内川先生からは、棚田景観を維持しながら、それなりに利便性も確保できるような基盤整備が必要だという点、畠山委員からは、稲倉の活動がさらに上田のいろいろな活動につながるような仕掛けが必要だという点でアドバイスをいただいたと思います。

それから、土屋市長から棚田サミットが開催されるというお話もありました。先ほど久保田委員長は「変えるつもりはない」おっしゃっていましたが、根っこになるところは変えなくても、「稲倉の棚田保全委員会」は、ますます発展せざるを得ないという状況にあると思います。

さて、棚田を保全していくためには、やはり人と金をどのように回していくのが重要です。お金は、いろいろな工夫をして生み出されていますし、様々な補助金や交付金を、とれるものはとっていくという姿勢も大切かなと思います。人をどう回すかについては、多様な人たちを呼び込むために、いろいろなイベントが試みられていますが、やはり注目すべき点は、一集落を超えた旧村レベルの地域の人々が、棚田の多面的機能を「自分たちのこと」として意識することが、保全活動のベースになっていることかなと思います

これらの点を本日の総括ということにさせていただき、パネルディスカッションを締めさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 演壇の皆様、有意義な意見交換、まことにありがとうございました。また、会場からもご参加いただき、それから、オンラインの参加をされた方々もありがとうございました。

以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウムを終了いたします。いま一度

拍手でもって終わりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

本日の結果は、後日、内容を整理した上で、ほぼ全文を当協会のホームページにアップいたします。今後の参考にしていいただければと思います。

なお、お帰りの際には、簡単なアンケート用紙をお配りしておりますので、ご記入の上、受付にお渡しいただくようお願いいたします。オンラインで参加の方々は、ZOOM会議から退室いたしますと、アンケートに回答する画面に切り替わりますので、そちらにご回答をいただくよう、重ねてお願いいたします。

以上でございます。本日はまことにありがとうございました。（拍手）

（閉会）

令和4年度（第61回）農林水産祭
（第33回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
（美しい棚田 稲倉 ～眺めるだけではない、カカワレルタナダ～）

発行 令和5年4月

編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会

〒104-0045

東京都中央区築地3-12-5 築地小山ビル4階

TEL (03)-6441-0791 (代)

FAX (03)-6441-0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。